まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

Unser HERR lebt
主は、生きておられる vol. 12 | 定価100円（本体95円）

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

graph magazine
2006 vol. 12

INDEX

巻頭メッセージ
04 日々新たにされる必要性／ゴットホルド・ベック

4人のメッセージ
16 主にある一致／酒井 千尋
24 復活を信じますか／古田 公人
32 やみから光へ／水渡 紀久雄
40 イエス様の恵みと孤独からの解放／和田 周作

連載メッセージ
48 [モーセの十戒] 第12回 神の聖なる戒め／ゴットホルド・ベック

4人の証し
60 主のみ恵みとあわれみに感謝します／クラウス・ローゼ
66 古きは過ぎ去り、見よ、すべてが新しく／山本 孝子
71 天国で会いましょう／新井 稔
75 私が苦しみの中からお願いすると主は答えてくださいました／高橋 義矢

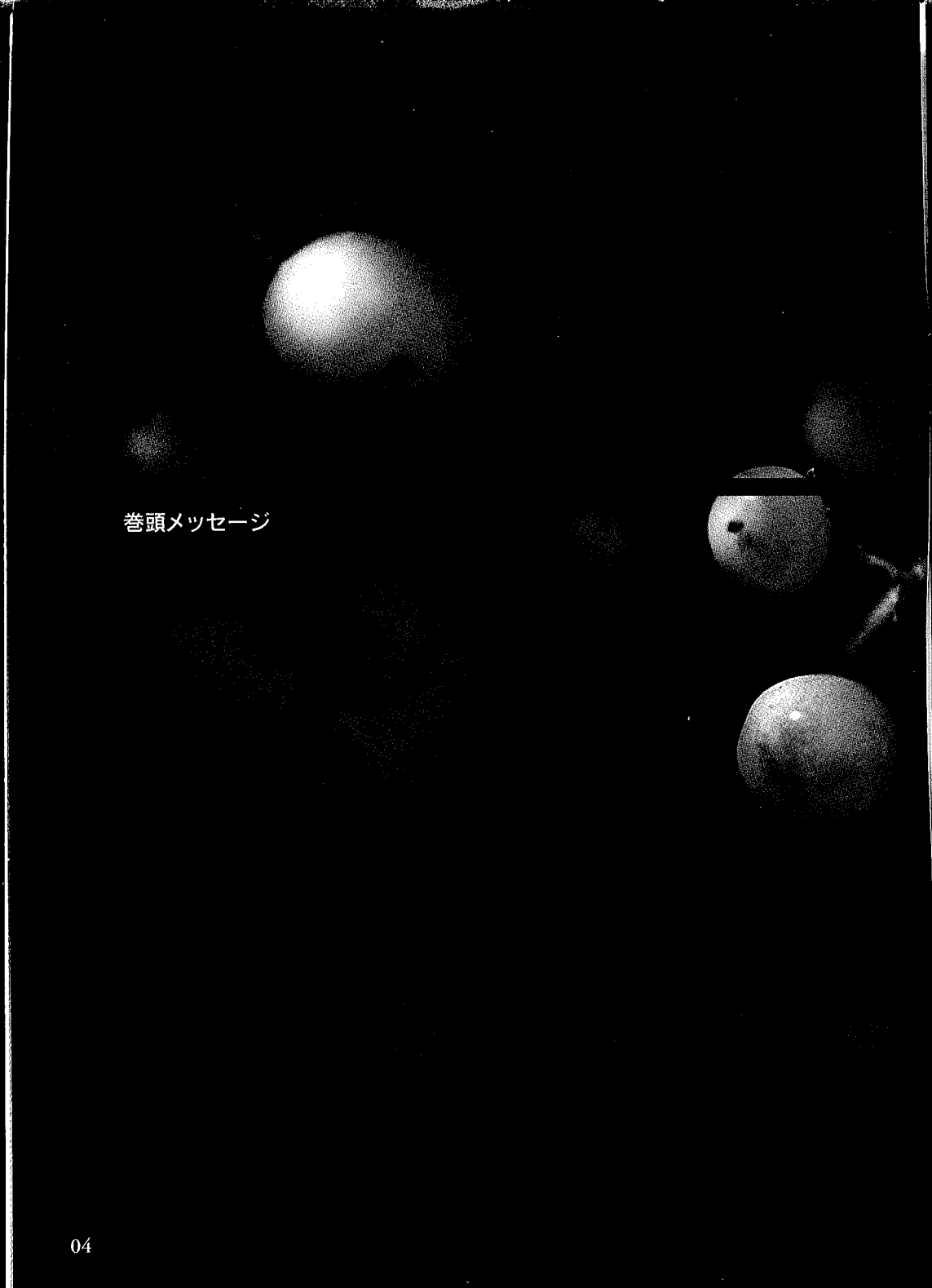
79 インフォメーション・ボックス
82 あなたの若い日に……キリスト集会で広がる若者たちの輪

各地の集会から
84 こちら芦屋集会で〜す

メッセンジャー予定表
86 メッセージ当番表 2006年12月〜2007年3月
89 2007年 よろこびの集い予定表
90 結婚・葬儀の報告

ドイツの料理
91 玉ねぎクーヘン

94 キリスト集会へのご案内
96 本の紹介
98 全国の集会住所録

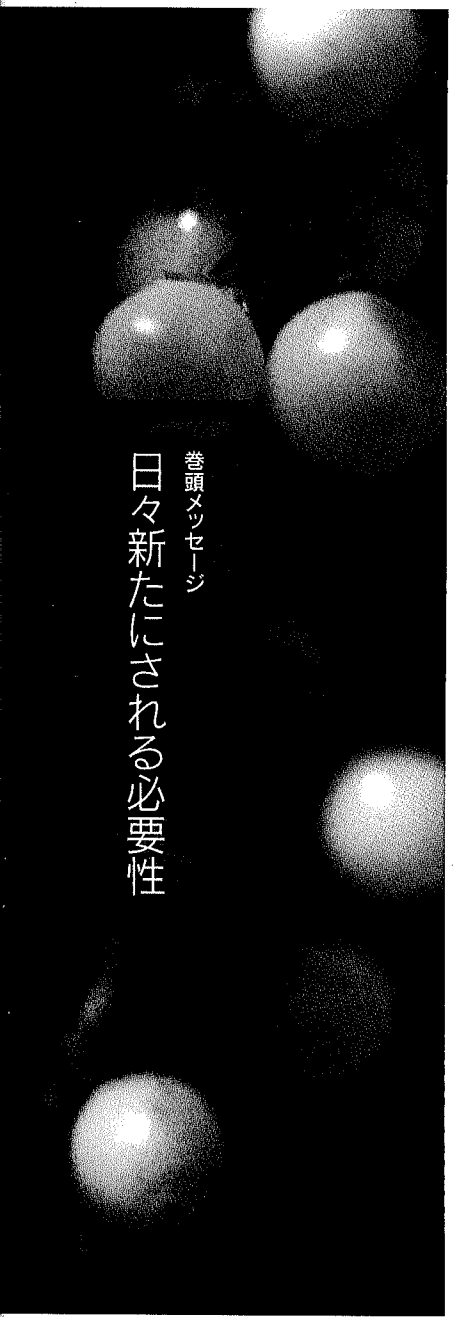


巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

勝利の生活の秘訣

ゴットホルド・ベック



巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。（ローマ　6･6）

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。（1コリント　2･2）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2･20）

きょう、この時間にも、私たちは「新たにされること」を必要としています。

イエス様を信じる人は、遅かれ早かれ、自分の信仰生活の妨げになるものが「自分を取り巻く環境や人」にあるのではなく、「自分の心の中」にあることに気づかされます。

多くの信者が霊的に進歩しないのはなぜでしょうか。それは、自分の生活を「自我」に支配させているからです。

御霊によって新しく生まれたキリスト者には、「永遠のいのち」が与えられていますが、私たちの内側には、それと相反する「生まれながらのいのち」が残っています。「生まれながらのいのち」は、新しく与えられた神の「永遠のいのち」を、表に出さないで、覆いかくそうとします。

コリント人への第二の手紙4章では、生まれながらのいのちを「外なる人」、神のいのちを「内なる人」と呼んでいます。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（2コリント　4･16）

私たちには、「生まれながらのいのち」、「外なる人」をもってしては、どうしても主なる神に喜ばれる生活をすることができないという体験をさせられるときが必ずやってきます。私たちはいつも同じような心配をし、相変わらず同じ罪を繰り返してしまう存在です。こういうことが続いて、ついに自分自身に絶望してしまったという経験を、あなたはお持ちでしょうか。

この絶望は、私たちが霊的に前進し、実を結びたいと心から願っているなら、必ず経なければならない道程です。どれほど熱心な信仰の人であっても、どれほど一所懸命に祈る人であっても、一度はこの霊的破産を通らなければなりません。このことについて次の三つの点、1.外なる人と内なる人、2.死によって実を結ぶこと、3.こわされた器、から見てみましょう。

1.「外なる人」と「内なる人」

まず、始めに「外なる人」と「内なる人」についてです。

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。（ローマ　7･22、23）

ここに見られるのは、主の救いにあずかったパウロが、何とかして主イエス様のみこころにかなった生活をしようと努める姿です。

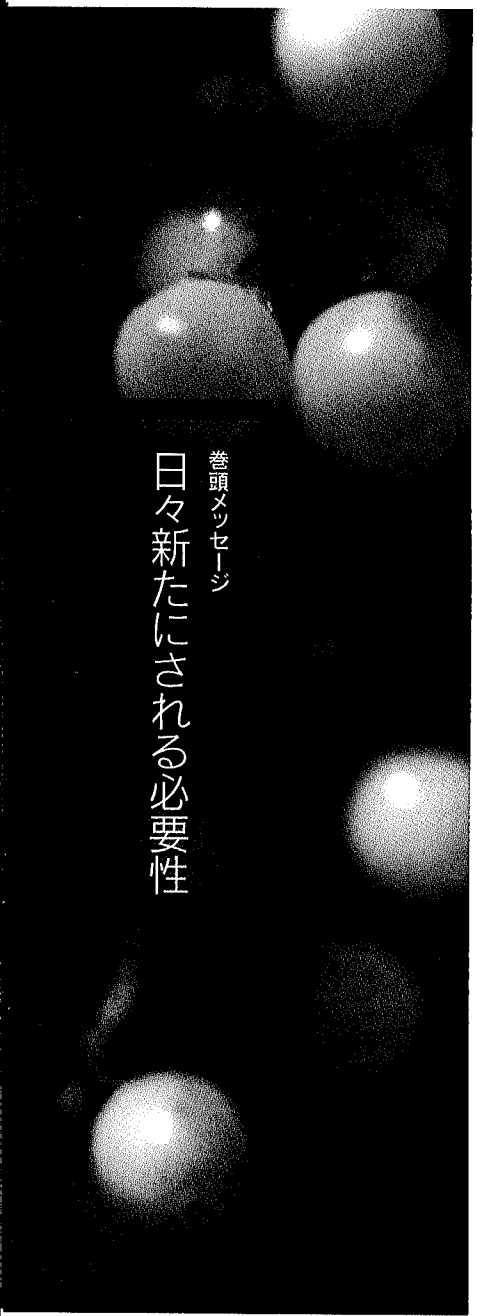
また、パウロはエペソの信徒たちに次のように書き送っています。

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。（エペソ　3･16）

パウロは、エペソにいる愛する兄弟姉妹方に、「あなたがたは既に救われていますが、あなた方の『内なる人』はさらに強められなければならない」と言っています。

パウロはコリントの兄弟姉妹にも、「内なる人」が日ごとに新しくされ、日ごとに上から新しい力をうけなければならないと書き送っています。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。（2コリント　4･16）



巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

これら聖書のみことばを見てわかるように、救いにあずかった人々の内側には「内なる人」と、「外なる人」があります。
聖書で言う「外なる人」は自我のいのちのことであり、「内なる人」は主なる神によって新しく与えられた神のいのち、すなわち主イエス様のことです。

バプテスマのヨハネが「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」(ヨハネ3・30)と言っていますが、ヨハネが言う「あの方」とは「内なる人」つまり、神のいのちのことであり、「私」とは「外なる人」つまり自我のいのちのことです。

私たちが主イエス様に仕え、霊的に前進したいと思うなら、「内なる人」、つまり、私たちの内に住んでおられる主、内住の主イエス・キリストが私たちの内側で、自由に働かれ、栄光を現わしておられなければなりません。「内なる人」が「外なる人」によって縛られていては、主のために実を結ぶご奉仕はできません。

「内なる人」、内に住んでおられる主イエス様は、私たちの内で現実的に主となり、支配者となりたいと願っておられます。また、主イエス様は当然そうあるべきお方なのです。今現在、私たちの内側で、主イエス様が支配者となっておられるでしょうか。
それとも時々、私たちの「内なる人」は、牢に入っているかのように、縛られてはいないでしょうか。「内なる人」は自由でなければなりません。主イエス様が、私たちの内に「支配者」としておられることが、一番大切なことです。
なぜなら、私たちの内に住んでおられる主イエス様が、私たちを自由にご支配なさる時、その度合いに従って私たちは主イエス様のために役立つ者となり、主の目に尊い者となり得るのです。
主を信じる人の中には、「外なる人」、自我のいのちを満足させようと努める人がたくさんいます。この世は自我のいのちを満足させるために、あらゆるもので誘っています。多くの映画、テレビ番組、娯楽雑誌などは、人間の「外なる人」を満足させるために作られています。

では、主イエス様の救いにあずかった私たちは、「内なる人」を養うために何をすればよいのでしょうか。
主イエス様は、「人はパンだけで生きるのではなく、主なる神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」とおっしゃいました。私たちは本当に、主の口から出るみことばによって生きているでしょうか。

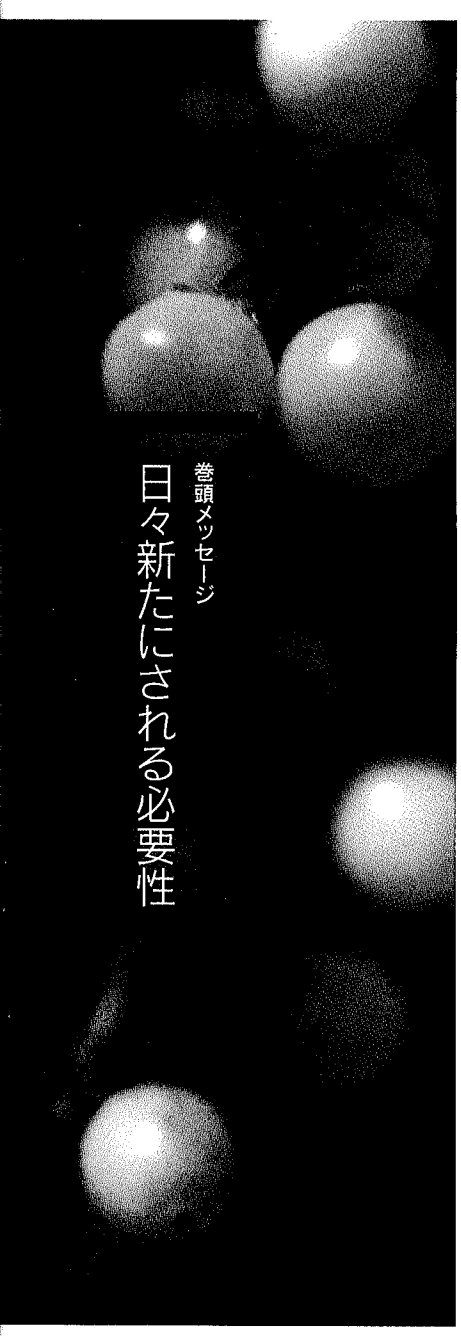
信仰を失ったキリスト者を見ると、悲しいことに、主からいただいたみことばに頼って歩んでいなかったために、信仰の闘いから落ちてしまったことが分かります。ただ聖書を読むだけで、よりよく主イエス様を知ろうと心がけず、聖書の中に主イエス様を求めようとしない人は、次第に霊的にひ弱になってしまいます。正しく聖書を学ばず、正しい祈りをしないキリスト者は同じところにとどまったままです。
私たちは「内なる人」のために、何かをしているでしょうか。私たちも、パウロのように「外なる人」は滅びても、「内なる人」は日ごとに新しくされていると言えれば幸いです。

2. 死によって実を結ぶこと

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。(ヨハネ　12・24,25)

一粒の麦の中にはいのちがあります。しかし、そのいのちは、堅い殻によってしっかりと包まれています。いのちが外に現われるためには、堅い殻が破られなければなりません。殻の中にあるいのちがどうかなのではなく、殻が破られて、いのちが現われるかどうかが問題なのです。この麦の殻は私たちの「外なる人」、生まれながらのいのち、自我のいのちのことであり、殻の中にあるいのちは「内なる人」、つまり神のいのち、主イエス様ご自身です。





巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

「内なる人」、主のいのちが自由にされるには、「外なる人」、自我のいのちが小さくされなければなりません。主イエス様は盛んになり、私自身は衰えなければならないのです。

しかし、何と多くの人々がただ自我のいのちだけしか持っていないことでしょうか。神のいのちについては、何も知りません。ただ主イエス様に出会った人々だけが、永遠のいのちを知っています。

御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。 **(1ヨハネ 5·12)**

多くの人は器だけを見て大切にします。「外なる人」だけを見て評価します。けれども私たちは、器の中に入っているナルドの香油の香りをこそ尊びましょう。

主を信じる人々の中には二つの種類があります。すべてのキリスト者が主イエス様を内に宿し、永遠のいのちを持っているのです。しかし、ある人々の場合は内なる主が押し潰されてしまって外に現われず、またある人々の場合は心の内を主が自由にご支配なさり、外に現われています。

ですから、主を信じる者にとって、問題は、いかにして永遠のいのちを受け取るかではなく、もう、既にいただいた永遠のいのちが、いかにして私たちのうちで自由を持っているかということです。救いにあずかった人々の「内なる人」が外に現われて始めて、他の人々に祝福をもたらすことができます。

ところで、多くの実を結ぶには、種子は死なければなりません。一粒の麦が死ぬためには、まず、地に蒔かれ、土の中に埋められることが必要です。そうすると、一人ぼっちになり、光が見えなくなります。やがて外の殻が腐っていきます。このようにして死にきるなら、私たちもパウロのように、次の告白をすることができるようになります。

私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。 **(2コリント 4·16)**

私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。 **(2コリント 4·11)**

3. こわされた器

外の殻が破られる時、内のいのちが現われてきます。

ひとりの女が、純粋で、非常に高価なナルド油のはいった石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。 **(マルコ 14·3)**

マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。 **(ヨハネ 12·3)**

神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。 **(2コリント 2·14)**

マリヤはとても高価な香油をもっていました。この純粋なナルドの香油の香りが家中に満ちる前に、まず、香油の入った器が壊されなければなりませんでした。もし器が壊されなかったら、ナルドの香油は外に香りを放つことはできなかったでしょう。

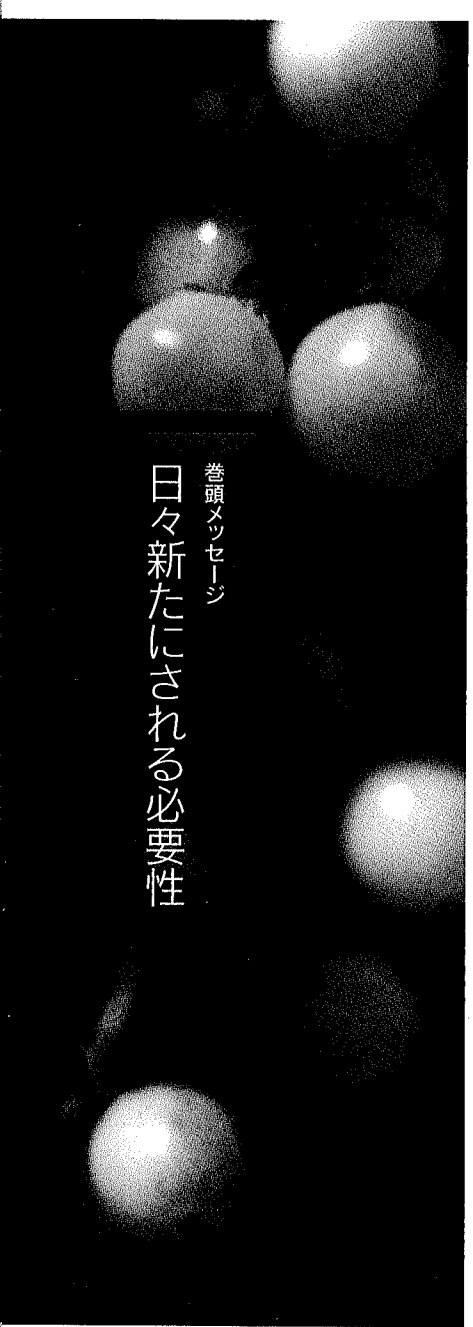
多くのキリスト者は香油をしっかりとしまったまま、信仰生活を送っているのではないでしょうか。主イエス様を受け入れ、永遠のいのちを与えられてはいますが、イエス様のいのちを外に現わそうとはしません。

見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。 **(2テモテ 3·5)**

このような信者の基本的な間違いは、一体どこにあるのでしょうか。中身よりも、器を大切にしていることです。多くの兄弟姉妹は、熱心であればそれでよいと思い、それが肉の力であるかどうかを見分けず、また、この世での見せかけを問題にします。すなわち、彼らは器だけ、「外なる人」だけを見ています。

しかし、私たちは器の中に入っているナルドの香油を尊びたいものです。器は隠れ、ただ、内なる主のみが栄えますように。

私たちは土の器であり、「内なる人」は主ご自身です。生まれつきの賜物や能力は、主のご支配によって使われなければ、実は何の役に



巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

も立ちません。
ですから、まず、「砕かれること」が必要です。私たち自身は消えてなくなってもいい、ただ、内に住んでおられる主イエス様が私たちを通して現われてくだされればよいのです。

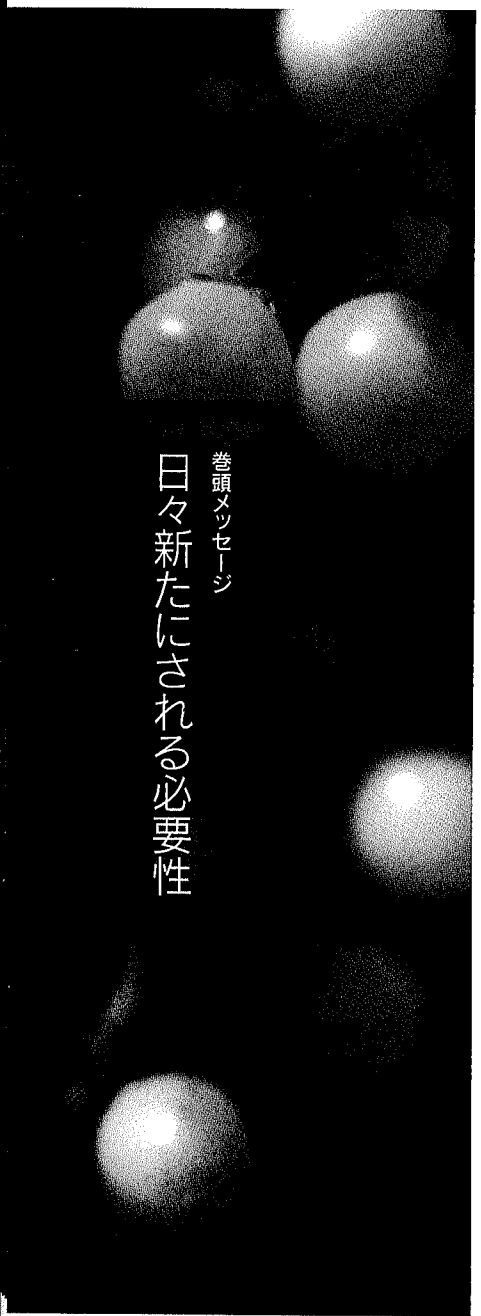
主の聖霊は、休みなく私たちに働きかけておられます。聖霊は私たちを導いて、私たちの自我が死んで、粉々に砕かれ、主の道具として、ただ主イエス様のご栄光のために用いられるように導いておられます。
繰り返しますが、「外なる人」は破れなければなりません。殻は砕かれなければなりません。イエス様が、「死ななければ実を結ぶことはない」と言われたとおり、「霊的破産」がなければいのちと祝福をもたらすことは決してできないからです。
このことを主イエス様は深く教えておられます。
私たちは少し困難に出会うと、不平を言い、つぶやき、うろたえてしまいます。けれども、主なる神は私たちの内に住んでおられ、私たちの内ではっきりした目的をもって働き続けておられます。それは、器の中にある永遠のいのち、「内なる人」が自由に外に現われるために、「外なる人」がこわされることです。
主によって与えられた土の器の宝は、外に現わされなければなりません。
今、急いで求められているのは、器ではなく、外に溢れ、流れていく主なる神のいのちです。また、この世が求めているものも、器ではなく、主イエス・キリストの光です。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。(2コリント　4・6)

大切なのは、「外なる人」に死に、「内なる人」に生きるようになるためには、悩みを通らなければならないということです。
もし、私たちが本当に主に仕え、他の人々に祝福をもたらそうと願うなら、自我のいのちを捨てなければなりません。

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。　(マタイ　10・38,39)

せっかく主イエス様の救いにあずかった人々の多くが、自分に対する主のみこころが何であるかを知らないのは大きな悲劇です。私たちは、私たちに対する主のご目的を深く知りたいものです。私たちの心の眼が、主のご目的に対して開かれるなら、今までのいろいろな問題や悩みや苦しみは、内に住んでおられる主イエス様が、私たちを通して現わされるためであったことがわかるでしょう。
私たちの過去に起こったできごとで、無駄だったものは何一つありません。主イエス様は最善の道を歩ませてくださいました。どんなに苦しい時も、先が見えずに困り果てていた時も、主イエス様はどのような時にも、最善をなしてくださっていました。
すべてのことは、ただ一つ、主イエス様は栄え、私が衰えるためになされてきました。主イエス様の霊が私の内に自由を得るために、外なる人は砕かれなければなりません。主イエス様はこの目標を目指して私たちを導いておられます。その導き方はひとりひとり違います。ある人には速く、ある人には遅く、主は働きかけられます。
たいていの場合、自分がゼロとなり、自分の内の主に完全に従うには、長い時間がかかります。私たちは、心の内に主のご支配を妨げるものを持っていますから、主はなかなか前に導くことができません。あなたがまだ、主に捧げていないものをもっておられるなら、きょう、それを主に捧げるために、祈りましょう。「主イエス様。あなたのために、兄弟姉妹のために、また、あなたを知らない人々のために、私はすべてをあなたに捧げます。あなたが、私の内に、私を通して外に現われることができるように、私は私自身をあなたにすべてお捧げ致します」と祈り、すべてを主に明け渡す人は幸いです。
さて、あなたは今まで自分自身に恐れを抱いたということがあるでしょうか。救われていても、どんな悪いこともできる可能性をもっているということに気づいたことがあるでしょうか。
巨人ゴリアテのような自我が、自分の前に立ちふさがり、どうしてもそれに勝つことができず、パウロのように**「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」(ローマ7・24)**と嘆いたことがあるでしょうか。
主イエス様は言っておられます。**「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でその**



巻頭メッセージ

日々新たにされる必要性

いのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」(ヨハネ12・25)と。自己否定とは、自分の権利を捧げることです。自己否定とは自分により頼まないことです。**「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」**(ルカ22・42)これが、主イエス様の一生を通して変わらない態度でした。

ですから、主イエス様から恵みがあふれ出て、いのちの泉が人々に分け与えられたのです。

私たちの考え、意志、感情のすべてが主のご支配のもとにおかれるとき、私たちの内からいのちの泉が湧き出てくるはずです。

私たちの考え、意志、感情は、生まれながら霊的ではありません。それらを聖霊の支配にゆだねるときはじめて、みこころにかなう者となります。それらを主イエスに捧げることにより、霊的なものになります。考え、意志、感情を自分から進んで主イエスに捧げなければ、主のいのちは私たちの内から流れません。

この決心は大勢の人々でするものではなく、一人一人が自分で決心しなければなりません。「主よ、私は自分に絶望しています。自分では何もすることができません。どうか、私を通して主ご自身のみこころをなさってください」と言いたいものです。

アブラハムはイサクを捧げる前に、イシュマエルを捧げました。ところが、救われた多くの人々は反対のことをしがちです。イシュマエルを捧げようとせず、イサクだけを捧げます。自分の意志、自分の肉の力で主イエス様に仕えようとします。

「きよめ」は、罪からの解放より、もっと深く、大きな恵みです。それは、自分の意思を主に捧げ、自分の支配を主イエス様にゆだねることです。

アブラハムは勇気を奮い起こして、主の命じられた通り、愛するイシュマエル捨て、イサクをとりました。(創世記17章16～21節、21章1節～14節参照)その後で、アブラハムにもたらされた主の祝福はどんなに大きかったことでしょう。

アブラハムの勝利の生活を私たちも送るためには、どうすればよいのでしょうか。アブラハムと同じように、自分の最も愛するものを主に捧げることによって、勝利の生活を送ることができます。

ドイツのアイドリンゲンの神学校校長、ヘデ姉妹は自分の生まれながらの性質のために、非常に苦しんだことがありました。いつも悪魔に試みられ、「お前は繰り返し繰り返し同じ失敗をしている。お前はもう駄目な人間だ」と言う囁きを聞かされていたのです。

ところがある日、姉妹は自分の古き人が十字架につけられた夢を見ました。その後で、また悪魔が責めにきましたが、そのとき、十字架につけられた自らを指し示したところ、悪魔は逃げて行ってしまったということです。

ある兄弟は8年間、集会から離れていたのですが、また戻って来たとき、次のように告白しました。「私は十字架につけられていなかったのです」と。十字架を見ると、そこには主イエス様だけでなく、私たちの古い人もともにつけられています。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。(ローマ 6・6)

どんなに悪魔が攻撃してきても、私たちはこのみことばをもって、立ち向かうことができます。主イエス様の勝利は完全です。主イエス様は、ご自身とともに私たちの古い人を十字架につけてくださいました。**「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられる」**(ガラテヤ2・20)のです。ですから悪魔は私たちに対して、何の権威も持っていません。したがって私たちは、「悪魔よ、退け」と言うことができるのです。

私たちのかかえている問題がなんであろうと、主イエス様のご臨在を深く心におぼえるまで、主のみ前に静まりましょう。そして主のご臨在を確信したなら、聖書を開いて、主が語られるお声を聞きましょう。このようにすれば、日々、新たな力を主からいただき、勝利の生活を送ることができるようになります。



主にある一致

**主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。
すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、
すべてのもののうちにおられる、
すべてのものの父なる神は一つです。
（エペソ　4・5,6）**

**召しにふさわしい歩み。
謙遜、柔和、寛容、愛……**

「主にある一致」について、次のエペソ4章1節後半から学んでいきましょう。

召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。（エペソ　4・1）

パウロは、「主は一つ、信仰は一つ」ということを説くにあたって、まず信者たちに、「召しにふさわしく歩みなさい」という勧めから始めています。「召しにふさわしく歩む」とは、具体的にどういうことでしょうか。それはすぐ後の2節以下にあります。

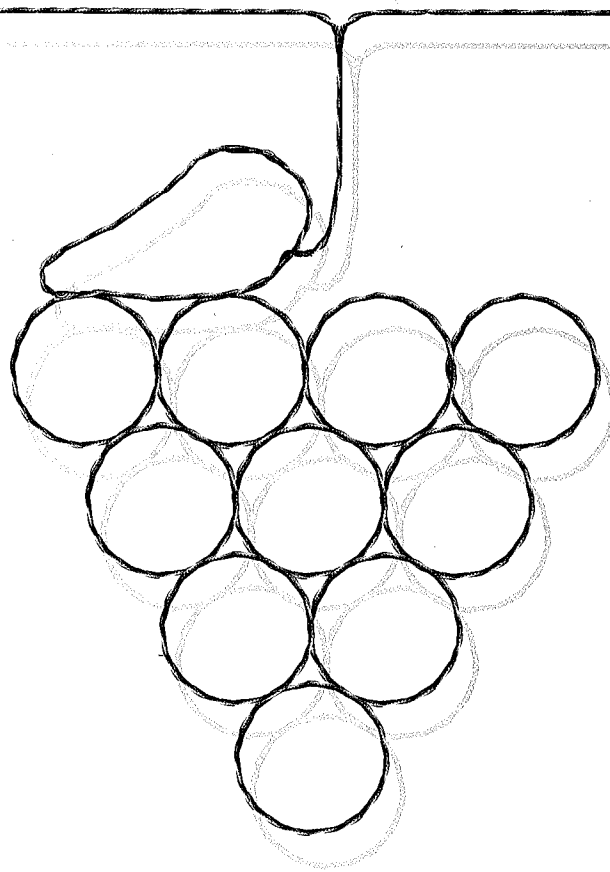
謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。（エペソ　4・2,3）

ここには、私たち信者が日々とるべき態度が示されています。これらは、「イエス様のみからだである集会」の一員である私たちが「一致を保つ」ために、どうしても必要な態度でもあります。これらを実行していくことは容易ではありません。でも、聖書が示してくださるから、主が喜ばれるのはそっちだ、とわかります。ですから私たちはそっちへ行こうとする。これって、主の命令というより、私たちへの主の愛なんですね。

パウロはまた、同じ勧めを、さらに詳しくコロサイ3章12節に記しています。

それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。…だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。（コロサイ　3・12～14）

ここに記されていることは、私たちが「主にある一致」に達するための核心です。イエス様はかつて「七度を七十倍するまで赦しなさい。」と言われました。「ほかの人に不満をいだくことがあっても互いに赦し合いなさい。」「主



**大ぜいいる私たちも、
キリストにあって一つのからだであり、
ひとりひとり互いに器官なのです。
(ローマ12・5)**

があなたを赦してくださったように赦しなさい。」「すべての上に愛をつけなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」そして、すべては、愛のゆえに一つに結ばれるのです。

御霊の一致を熱心に求めなさい

さて、エペソの4章3節に戻って、「主にある一致」について考えてみましょう。

平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。(エペソ　4・3)

この「平和のきずなで結ばれて」とは、「信者は争わないで仲よく」、という意味だけではありません。また、「世界平和」とか「戦争のない状態」だけの意味ではありません。聖書に出てくる「平和」は、人と人、国と国の平和もありますが、まず、「神と人との平和」です。主が求められるのは、第一に「神と人との平和」です。神と人が「平和でない」状態とは、「人が神に対して平和を持とうとしない」、つまり「神を信じない、無視している、敵視している、そむいている」という状態です。これに対して「神との平和」とは、「唯一まことの神

を信じ」、「神もまた私たちを受け入れ」「主に愛され」「私もまた主に信頼し、従っている」という状態です。平和とは、神と対立せず、和解しているという状態です。

続いて3節の後半、「御霊の一致を熱心に求めなさい。」ですが、これについては、1コリント2・10に次のようにあります。

**神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。……神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。……私たちには、キリストの心があるのです。
(1コリント　2・10,11,16)**

イエス様ご自身もこう言っておられます。

「いのちを与えるのは御霊です。……わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」(ヨハネ　6・63)

「御霊の一致」とは、「イエス様が話されたみことば、霊に聞き従うこと」です。「集会の一致」とは、「神の御霊に導かれる一致」、「神の御霊にすべて明け渡す一致」です。つまり「キリストの心に従う一致」。それはまた、単純に言えば「神の言葉である聖書に従う一致」。そして、「主のみこころを教えてください」とみなで祈ることによる一致です。

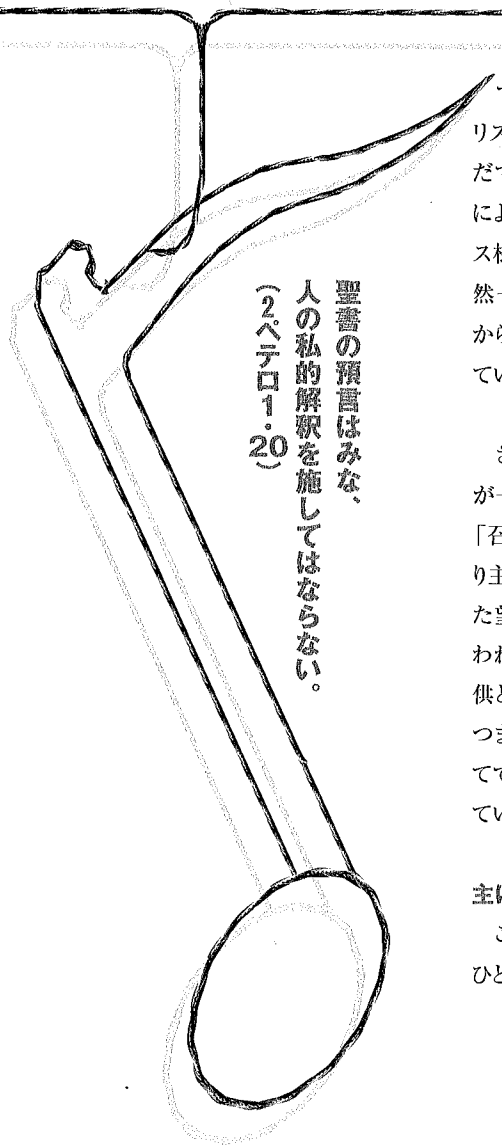
からだは一つ、御霊はひとつ。

そしてここから、「主にあって一つ」という聖書の核心が、明らかにされていきます。

**からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。
(エペソ　4・4)**

「からだは一つ」とは、主のみからだである集会、その信者たちが「一つになっている」ことです。「からだは一つ」については、エペソをはじめ、ローマ人の手紙にも出てきます。

大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。(ローマ　12・5)



聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない。（2ペテロ1・20）

ですから、私たちの集会は、「主イエス・キリストを頭とする集会」であり、「主のみからだである集会」です。「イエス様のみこころによって一つになっている集会」です。イエス様のみこころは一つですから、私たちも当然一つです。御霊もまた、神のみこころですから、当然一つです。「私たちが一つになっている」ことを、主は、強く命じておられます。

さて、4節の後半、「召しのもたらした望みが一つ」について考えてみましょう。「召しがもたらした望み」とは、召された、つまり主を信じて救われたとき、「主からいただいた望み」です。主を信じ罪赦されたこと。救われたこと。聖霊をいただいたこと。神の子供とされたこと。永遠に主とともに生きること。つまり、聖書にある恵み、望み、希望のすべてです。その希望によって、ともに一つになっている。それが一致です。

主は一つ、信仰は一つ！

このエペソ4章の5、6節は、聖書の中でもひときわ高く輝く神の啓示です。

主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。（エペソ　4・5,6）

ここに私たちの集会の信仰のすべてが語られています。私たちは、主にあって一つです！

5節の頭の「主は一つ」という言葉は、ただお一人の主にあって私たちが一つであることを示しています。また同時に、「主は一つ」とは「唯一の神」、創世記の「初めに神が天と地を創造した。」を指し示し、またモーセの十戒の第1戒「あなたにはわたし（主）のほかに、ほかの神々があってはならない。」を指し示しています。ただ一人の神、まことの神、主。私たちは、その主を信じ、従い、子供とされることによって一つに結ばれています。つまり「主は一つ。信仰は一つ。」です。

次の「バプテスマは一つ。」という言葉については、聖書の他の部分を、少し見てみましょう。

私たちはみな……、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。（1コリント　12・13）

はじめてイエス様を知り、自分を知り、自分の罪が分かり、それを告白してイエス様の十字架による赦しをうけ、主に従い、新しいいのちに生まれ変わる。これが主からいただく信仰のはじめ、「一つの御霊によってバプテスマを受け、」ということの意味です。世の多くの教会の洗礼、バプテスマは、信者資格を得るための行事、つまり通過儀礼になってしまっています。そういうカタチではない。主が直接私たちに働きかけてくださる、霊的な洗いと聖め。これがバプテスマです。霊による、再生、更新、生まれ変わり。もちろん、主を信じる者は、みな新しいいのちを主からいただきます。霊による更新です。主は一つですから、バプテスマも当然一つ。それによって生まれ変わった私たちも当然一つのものとされています。

集会の一致について

さて、ここでちょっと、私たちの「集会の一致」について考えてみましょう。

「主にあって一つ」は、集会で最も大切なことであり、主の命令です。集会は、つまり私たちは、「主にあって一つ」でなければなりません。では、私たちはどうすれば一つになれるでしょうか。それは実に簡単です。「主にあって一つ」の原則は単純です。

「聖書はなんと言っているか」に従うことです。「私たちがどう考えるか」ではない。「人がどう考えるか」ではない。ただ、「主がどう思われるか、主が喜ばれるかどうか」です。これが一致の基本であり、大原則です。

しかし、聖書には、読み方があります。聖書の文章は、誤って読み取られる危険が常にあります。これを避けるにはどうするか。このキリスト集会は、ベックさんの聖書の解き明かしの上に成り立っている集会です。だから当然、その解き明かしを基本にし、その基本に従います。それと異なった聖書の読み方は、「一つになる」ことを妨げます。

実例として、一番はっきりしているのは、キリスト集会のとる、「異言、いやし」に対する断固とした拒否の姿勢です（実を結ぶ命第3部参照）。また、礼拝や聖餐のし方。洗礼の意味。救いの確信。これらはただ純粋に「聖書に書かれてあることのみ」にその基礎を置いています。「聖書のみ。みことばのみ。福音のみ。」これが私たちの集会の原則です。

もし、集会で何か問題が起こったなら、解決の唯一の指針は、「聖書は何と言っているか」です。私やあなたがどう考えるか、ではない。人間の考えによる合議や、多数決による一致ではない。この世のヒューマニズムではない。「聖書は何と言っているか」です。

聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない。（２ペテロ　1･20）

ただ、まっすぐに、主に、聖書に、向き合うことです。

私たちの集会の「主にある一致」とは、私たちの考えや努力によって作り出す、「うわべだけの一致」ではありません。妥協と放任による、「なまぬるい一致」ではありません。うわべだけ、人に従うことによって保たれる、「妥協の一致」ではありません。「八方美人的な社交上手による、ことなかれ一致」でも、「仲良しクラブ的馴れ合い一致」でもありません。真の一致とは、私たちがへりくだって主の前に立ち、主に委ねる時に、主自らがくださる、主ご自身が私たちに満ちてくださる「まことの一致」です。

「まことの一致」は、主ご自身が、
1 聖書のみことばによって
2 聖霊の導きによって
3 祈りに対する答えによって
4 愛と恵みによって
与えてくださいます。
これが本当の「主にある一致」です。

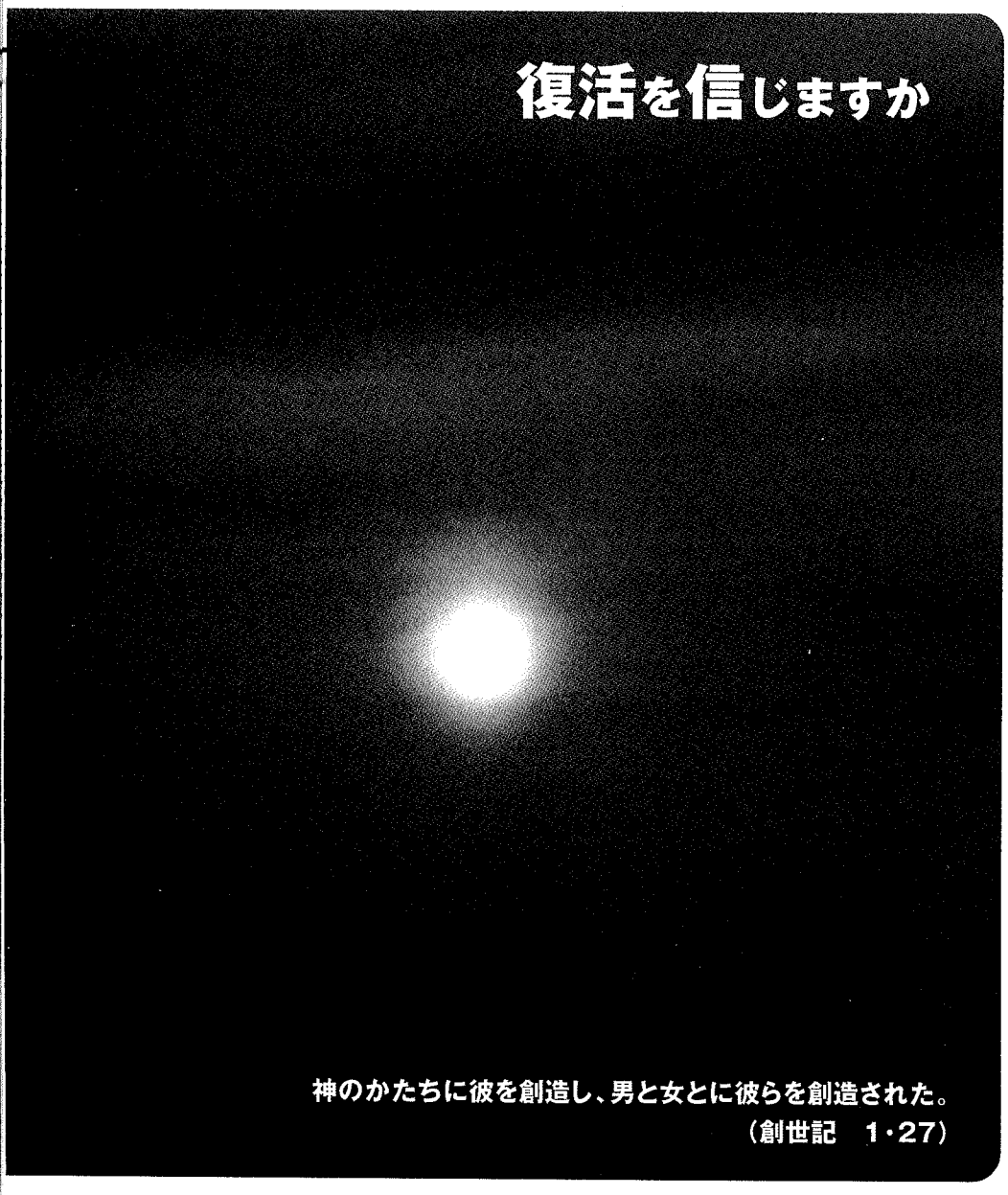
私たちは、熱心に「主にある一致」を追い求めましょう。熱心に、「主にある一致」から外れないようにしましょう。主が最も喜ばれるのは、私たちの心からなる明け渡しと、「主にある完全な一致」です。

（2006.5.3福音センターでのメッセージから）

酒井千尋
芸大中退、早大卒。
エディター、ライター。



復活を信じますか



神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。
（創世記　1・27）

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。（ヨハネ　20・27）

私があなたがたに最もたいせつなこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。（１コリント　15・3～5）

使徒パウロは福音の要として十字架の死と復活をあげています。言い換えるなら、十字架と復活が中心になければ福音ではない、と言っています。しかし、パウロはその際、「聖書の示すとおりに」、「聖書に従って」と書き加えました。書き加えたというよりも、言いたいことはそれなのだ、と言わんばかりに二度も書きました。このことによって、主は真実なお方である、と強調したのです。事実、主は真実なお方です。私たちの今も、後も、喜びも、希望も、すべては主の真実にかかっています。

復活によってもたらされたもの

現代の多くのキリスト（!）教会は十字架の恵みを軽視していますが、復活についてはもっとひどい状態にあります。それこそが現代の教会の恐るべき病徴です。主は、このような教会に対して、かつてペルガモの教会になさったように、鋭い両刃の剣を持って臨まれる（黙示　2・12）に違いありません。いっそのこと、彼らはキリスト教会でなかったらよかったのに、と思います。

主は、信じない者にならないで、信じる者になりなさい、とおっしゃいました。しかし、信じるためには、何を信じるかを知る必要があります。そのようなわけで、復活について、学びたいと思います。

キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。
（ローマ　14・9）

イエス様の復活は、世界を変えたできごとです。まず、復活を通して、イエス様はすべての人の主となってくださいました。しかし、もし復活がなかったら、私たちはイエス様を神の御子と知ることはできません。復活こそイエス様が神の御子であることを公に示すできごとでした。また、それゆえに、イエス様が主であると分かるのです。

神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。（エペソ　1・20～21）



イエス様が主であるとは何を意味するのでしょうか。それは、主なる神と同じ権能をお持ちになっているということです。私たちは、このお方を主と、親しくお呼びすることが許されています。このお方を信じる信仰によって大胆に確信を持って神に近づくことができます（エペソ　3・12）。また、このお方の名によって祈ることができます。

今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。…まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。それから終わりが来ます。…最後の敵である死も滅ぼされます。
（１コリント　15・20、23、24、26）

ひとりの人（アダム）によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった（ローマ　5・12）のですが、イエス様は初穂として死者の中からよみがえられました。初穂とは、収穫を感謝して神に捧げるために最初に刈り取られるもので、いわゆる収穫物ではありません。しかし、初穂が刈り取られる時、すでに収穫の時は近づき、穂は刈り入れを待つばかりになっています。そのように、終わりが近づいています。主は、すでに死に勝利してくださっています。

あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。（コロサイ　2・12）

信じる者はキリストとともによみがえらされたのです。考えても分かることではありませんが、事実です。いま私たちは、キリストのいのちを受けています。永遠のいのちにあずかるものとされたのです。もはや、死は、恐れるべきものではなくなりました。天国への旅立ち、喜びの門出となったのです。

注意したいことは、ばくぜんとした信仰には、永遠のいのちの保証はないということです。「山は、どの道から上っても頂上にたどり着く、それと同じように信じる対象の違いはたいしたことではない」と言う人がいます。しかし、それは救いについて知らない、無責任なことばです。「キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって（コロサイ2・12）」と明記されているように、何を信じるかが決定的に重要です。

あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。…ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。
（使徒　2・23、24、33）

よみがえられ、天に昇られたイエス様が、主なる神から受けた聖霊を注いでくださったことによって、キリストのからだなる教会が誕生しました。この教会は、主の再臨を待ち望む信徒のために与えられたものです。信徒が、**信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためにです。（エペソ　4・13）。**

歴史に即して言えば、イエス様が十字架上で死なれるという、予期せぬ事態に遭遇した弟子たちはユダヤ人を恐れてひっそりと戸を閉じていました。しかし、聖霊を受けたとき、「イエス・キリストは主である」と宣べ伝えるに必要な確信と勇気を得、目覚しい成長を始めました。用いられるためには教会の誕生が必要だったのです。

あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。
（エペソ　2・20～22）

キリストのからだなる教会は、キリストにある一致と霊的成長という二つの性質を持ち、福音を大胆に語ります。そこには、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制といっ

彼は主を信じた。
主はそれを彼の義と認められた。
（創世記　15・6）

た御霊の実（ガラテヤ　5・22,23）がたわわに実ります。たとえ一人ひとりの信徒は小さく無力であっても（いや小さく無力だからこそ）、主は、実を実らせることのできるお方です。そのような教会には、あたかも夜の灯火に虫が集まってくるように、疲れた者や重荷を負う者が集められます。

復活を信じることの大切さ

これまで述べてきましたように、イエス様の復活こそは信仰の基盤です。復活がなかったら、私たちの信仰はむなしく（1コリント　15・17）、希望はありません。しかし、復活を信じるということは、また別の意味で重要です。

彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。（創世記　15・6）

誰かを信じるとは、その人のことばを信じるということです。信仰の父アブラハムは、主なる神のことばを信じ、神はそれを彼の義とお認めになりました。なお、義と認められるとは、正しい者と認められると言っていいのではないかと思います。ローマ書は、次のように記しています。

彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。
（ローマ　4・11,12）

ここでは割礼が問題点の一つになっています。しかし、今はそれを離れて、この文章を見てみたいと思います。すると、アブラハムは、彼の信仰の足跡に従って歩む者の信仰の父である、と書かれていることが分かります。アブラハムの信仰が大切だ、ということです。

では、アブラハムの信仰はどのようなものでしょうか。それは、死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方は（ローマ　4・17）、約束されたことを成就する力を持っておられる、と堅く信じた（ローマ　4・21）、ということです。私たちは、この、信仰に倣うことが必要です。

主なる神は何でもできるお方だ、ということにはだれも異存はないでしょう。しかし、神は死者を生かす力がある、ということになると、この世は反発します。復活の信仰を持たない教会もくちびるを閉ざします。主なる神は全能であると頭で分かっていても、そこまでは考えられないのです。このような教会と信者に対する、イエス様のおことばは、次のようなものです。

イエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」
（ルカ　24・25,26）

復活を信じることができなかった二人の弟子に向かって、あなたたちは、すべてを信じない人たちだ、と仰せになっています。イエス様にとっては、復活を信じないことは、全能なる神の力を信じないことであり、結局のところそれはすべてを信じないことを意味します。大切なことは、私たちがどう考えるかではなく、イエス様がどうお考えになるか、です。すると、仮に復活以外のすべてを信じても、復活を信じないなら、すべてはむなしいのです。もちろん、それはアブラハムの信仰とは異なります。

（アブラハムは、）神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた



からです。（ローマ　4・21～25）

アブラハムは、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じたがゆえに、義と認められたのですが、私たちも、主イエス・キリストを死者の中からよみがえらせた方を信じるなら、その信仰が義と認められる、と書かれています。

罪の贖いは、十字架上で流されたキリストの血によってなされました（エペソ　1・7）。それは1回限りのできごとでした。すべての人の罪はそのことによって贖われました。しかし、だからといって、すべての人の罪が赦されたわけではありません。ただ、復活を信じる者だけが義と認められ、罪の赦しにあずかります。復活を信じなければ、罪の赦しにあずかることはありません。

このことから明らかなように、復活がなければ、私たちが義と認められるすべはなかったのです。さいわいなことに、イエス様がよみがえってくださったことによって、義と認められる道が開かれました。

信仰なしに義と認められる人はひとりもいません。「義人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・10）」とあるからです。私たちの内にも、義と認められるものは何一つありません。パウロの、「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています（ローマ　7・18）」という告白は、すべての人にあてはまります。

私たちは、自分の力で神さまを喜ばせようとしても、できないのです。そのことを知るなら、パウロのように、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。（ローマ　7・24、25）」と言う以外にありません。人は、キリストの復活を信じることによってのみ、義と認められ、救われます。次のみことばはそのことを明瞭に語っています。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。（ローマ　10・9）

おわりに

主は、福音の中心点を見失ったサルデスの教会に、あなたは死んでいる、と告げられました（黙示　3・1～3）。その意味で、世界の多くの教会は、福音の中心点を見失い、死んでいます。すべての信者は、自分の教会が生きているか、死んでいるかを見分ける必要がありますが、それは決して難しいことではありません。私たちは、生きた教会と死んだ教会の違いを、葬儀において、容易に知ることができます。

復活を信じる生きた教会の葬儀は、別れは悲しくても、天に召された信者が主とともにある喜びを確信し、また天国での再会の希望にあふれて、主をほめたたえることができます。

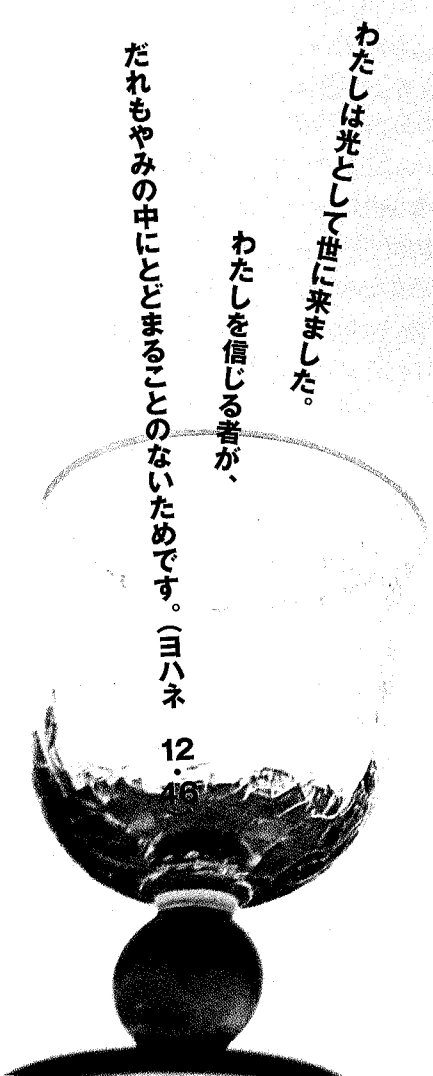
しかし、復活を信じない死んだ教会では、死の悲しみが支配します。永遠の滅びにいたる死の悲しみです。それに負けまいとするかのように、故人の人柄や業績がほめたたえられます。

主は、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」というみことばで、わたしに祈り求めるなら信じる者にしてあげよう、と仰せになっています。イエス様は、サルデスの教会に対し、「あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。（黙示　3・3）」とお語りになりました。これはサルデスの教会だけの問題ではありません。福音の中心点を見失えば、主は外に出て行かれます（黙示　3・20）。私たちの集会も、主に喜んでいただける、キリストのからだなる教会にふさわしくあるためには、受け、また聞いたことを思い出し、堅く守り、いつも悔い改めることが必要ではないでしょうか。

古田公人
東京大学名誉教授
京都府出身、桃山高校、
京都大学農学部卒



やみから光へ



わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。（ヨハネ　12・46）

この世のやみが一段と深まっているのではないでしょうか。とくに人の心のうちに広がるやみが、なんという悲劇をもたらすことか。あまりにも悲惨な事件が続きます。

聖書には、創造主なる神様が、やみに包まれていた地に向かって「光よ。あれ。」と仰せになったことにより、光ができたとあります。続いて神様は、創造のみわざを重ね、ついには特別の思いを込めて人間を創造されるのですが、こうして造られたものすべては「非常によかった」と聖書は語ります。

ところが、最初の人間アダムとその妻が神様に背き、罪に堕ちたところから事態は変わりました。彼らは、禁断の木の実を食べて自ら神のようになれという悪魔の声に、惑わされたのです。以来、すべての人間は、罪ある者として生まれ、労苦して地上を歩み、ついには死をもって一生を終わるというあわれな存在となりました。しかも死後には、神のさばきを受けなければならないと定められているのです。

聖書は、この人間の姿を「やみと死の陰に座す者、悩みと鉄のかせとに縛られている者」（詩篇　107・10）と言い表しました。

しかしこの状態は、決して神様の望むところではありません。イエス様が語られたように、あわれみ深い神様は、放蕩息子である人間が悔い改めて帰ってくるときを待っておられます。

そのために、ご自身で大いなる光を地上に送って人間を「やみと死の陰」から解放する、という預言の言葉も、イザヤを通して与えてくださいました。

しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは光栄を受けた。やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。（イザヤ　9・1、2）

光としてこられた方

この預言どおりに遣わされた方が、神のひとり子イエス・キリストであり、冒頭の聖句はそのことを示すイエス様ご自身の言葉です。

「光として来た」とは、預言どおりの「光」、つまりだれもやみの中にとどまることがない

ように「救い主」として来られたのだ、という意味です。

ところが人々は、イエス様を受け入れようとはしませんでした。かえって当時の宗教指導者などに扇動されて、この方をさげすみ、痛めつけ、ついには十字架にかけて殺してしまったのです。

しかし驚くべきことに、むしろこのような受難を通して、イエス様は「まことの光」としてのご自身を明らかにしてくださいました。
まずイエス様は、すべての人の身代わりになって十字架の上で神様からの罰を受け、死んでくださいました。それによって、私たちのような者にも、罪赦されて神様のもとに帰る道が開かれたのです。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。(1ペテロ　2・24)

またイエス様は、3日後によみがえられて、「死」に勝利されました。この復活の御業によって、私たちイエス様を信じる者は、死の恐怖から解放され、よみがえりのいのちをいただいて、新しく生きる者とされました。

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。(ヘブル　2・14、15)

神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。(1ペテロ　1・3)

さらにイエス様は、信ずる者は永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがない、と約束してくださっています。

**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。
(ヨハネ　3・16)**

やみから光へ

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。(1ヨハネ　4・10)

このようにイエス様は、私たちにとって「救い」であり、「いのち」であり、「希望」であり、また「神の愛」でもあって、まさに「まことの光」「救い主」と呼ぶにふさわしいお方です。

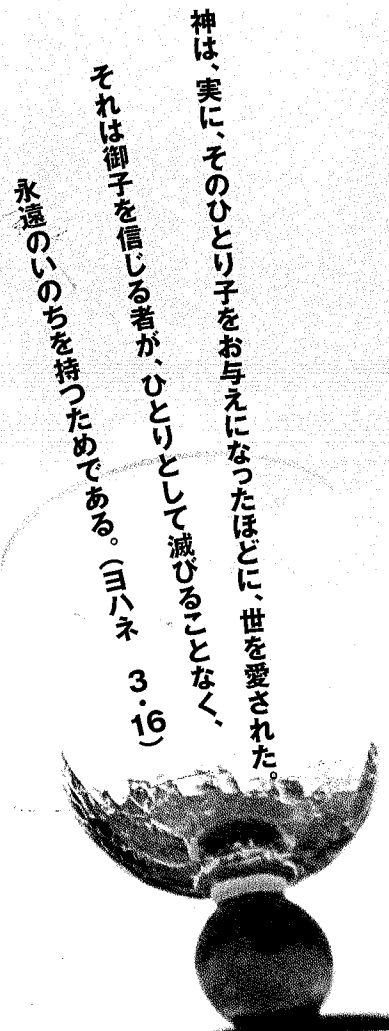
光との出会い

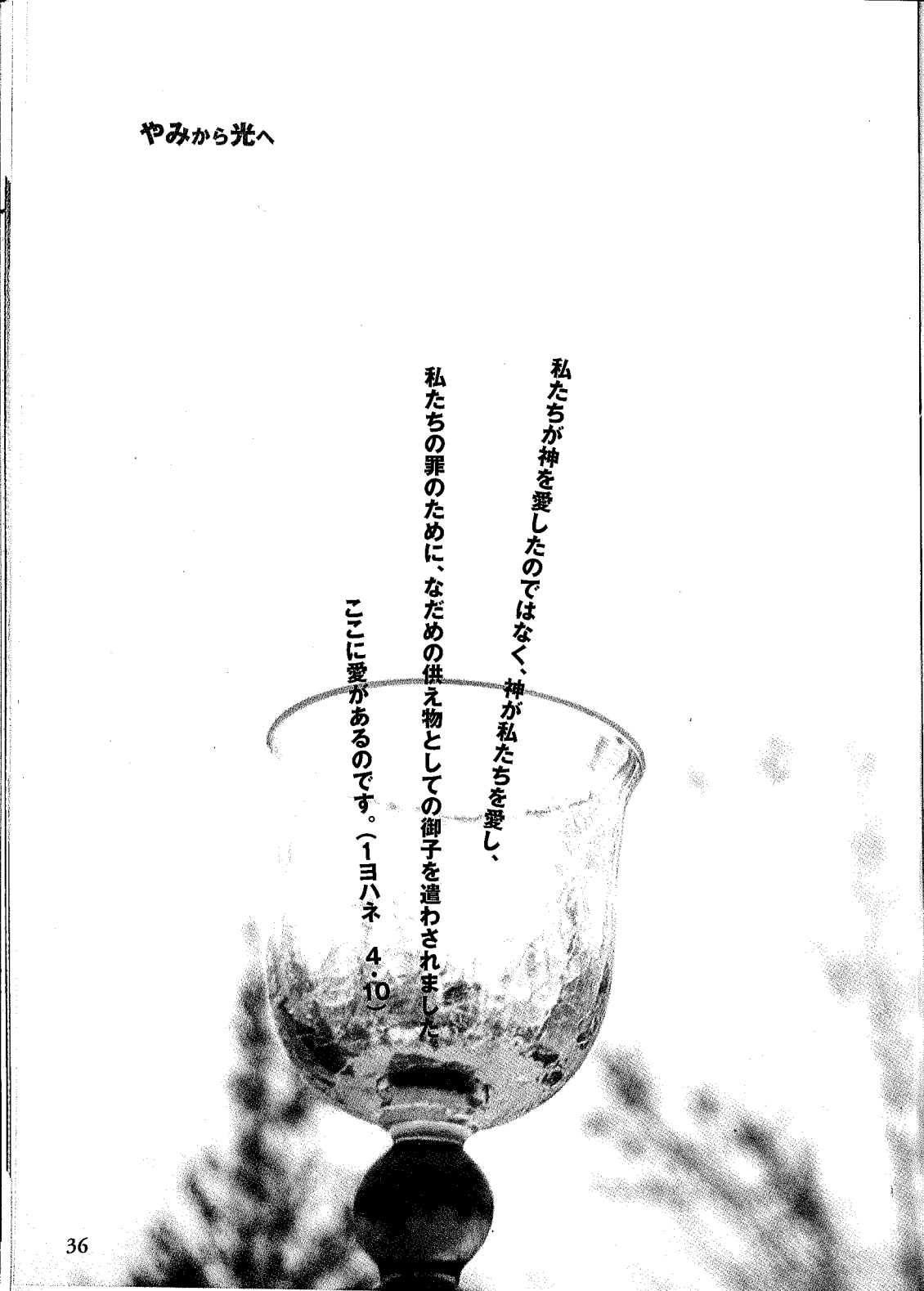
それでは、人はどのようにしてこの「光」である、イエス・キリストと出会うことができるのでしょうか。答えは簡単です。

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。(ローマ　10・13)

御名を呼び求める、つまりイエス・キリストを自らの「光」、「救い主」として受け入れるなら、だれでも救われるのです。ただ素直に信じればよいのであって、それ以外のどんな資格や人間的な努力も必要としません。

キリスト集会の刊行物に「光よあれ」というシリーズがあります。それまで悩み苦しんでいた人々が、どのようにして「光」に出会い、





恵みをいただいたかを綴った「証し」の文集です。

そこで共通して語られていることは、これまでの生き方を悔い改めてイエス様を信じると決心したことにより、光を見る思いがしたということです。もう罪は赦されている、自分のような者も神様から愛されていると知って、心が平安と喜びに満たされた、ということです。

こういう「証し」は、イエス様をご存じない方には信じがたいことかも知れません。しかし、これらの本を手にしたことによって救いに導かれた人が、キリスト集会にはたくさんいます。

私もその一人でした。それまで、仕事、趣味、スポーツなどサラリーマンとして与えられた機会を自分なりに生かし、意義ある人生を目指しているつもりの私でした。しかし一時的な満足や喜びはあったにせよ、自分は何者なのか、なんのために生きているのか、またこの世界は一体どうなるのか、という根本的な問いに対する答えを見つけることができませんでした。

人生も残り少なくなり、焦り始めていたころのことです。友人からもらった「光よあれ」がきっかけとなって、私も本物の平安がほしいと考えるようになりました。

紆余曲折はありましたが、重ねて聖書の福音に触れるうちに、長年探し求めていた答えがここにあると感じたとき、突然、やみの中に光を見る思いがしました。その時の喜びを、今でも鮮明に覚えています。

光を妨げるもの

もちろん素直に信じることは、簡単なようで簡単ではありません。私の場合もそうでしたが、少なくない障害が心の奥底に横たわっています。

障害の一つは、自分ががんばることによって満足を得ようとする考え方です。神様などに頼りたくない、自分の思うままに生きて幸せを得たいということです。

しかしこのように神様に背を向ける生き方こそが「罪」と言われるものであり、人間がやみの中をさまよい歩かなければならない根本原因なのです。

見よ。あなたがたはみな、火をともし、燃えさしを身に帯びている。あなたがたは自分たちの火のあかりを持ち、火をつけた燃えさしを持って歩くがよい。このことはわたしの手によってあなたがたに起こり、あなたがたは、苦しみのうちに伏し倒れる。
（イザヤ　50・11）

いくら自分を頼りにしても、人は自分で自分を救うことはできません。結局まことの光に出会うことなく、迷いと悔悟、満たされぬ心を抱えたまま、ただ神のさばきを待つことになります。それから、宗教に対する警戒心も、障害になるでしょう。でも、「信じ救われる」ということは、人間が作り上げた宗教とは関係ありません。自分の無力さ、みじめさを知り、子どものように素直になって救いを願い求めるなら、だれにでも与えられる神様の、天からの恵みです。決して人間を縛り拘束するものではありません。それどころか、「やみと死の陰」から解放されて、神様にある真の自由へと移されます。だからこそ「救い」と言えるのです。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ　8・32)

もう一つ障害となるものに、「まずは勉強をしてから」という考え方があります。
しかし、いくら聖書に精通したからといって、それで救われるというものではありません。イエス様に心を開くことをいさぎよしとしないで、勉強してから、理解してからという態度は、救いを遠ざけるだけです。

結局、悔い改めたくない、信じたくない、という気持ちが一番の障害ではないでしょうか。人間は、自分は正しい、立派に生きていると考えたがるものです。これもまたサタンが喜ぶ心の内のやみにほかなりません。

**義人はいない。ひとりもいない。
(ローマ　3・10)**

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。(マタイ　18・3)

光の中へ

このほかにも、いろいろな思いが決心を鈍らすかもしれません。しかし、ひとたび信じる決心をして心を開くならば、イエス様はすぐ近くであなたを待っておられることがわかります。そしてあなたが感じていた障害も、ひとつひとつ、場合によっては一気に取り除いてくださいます。

とくに今やみの中で悩んでいるからといって、あるいは罪の重荷に苦しんでいるからといって、絶望に陥ることはありません。そういう方こそ、「まことの光」に出会う準備ができた方です。

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。(イザヤ　38・17)

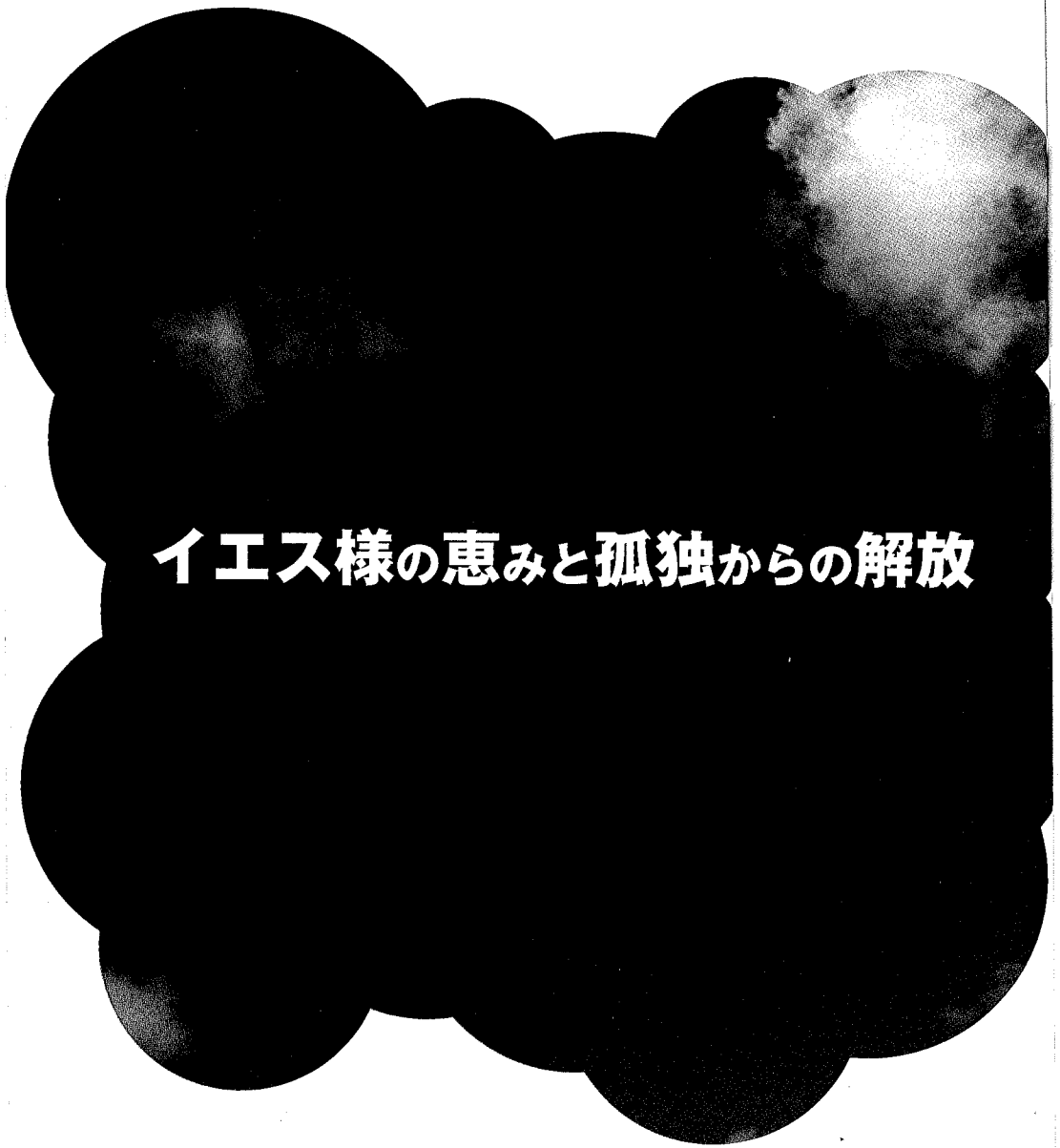
恐れることも、諦めることもありません。神様が遣わされた「光」イエス・キリストは、あなたの決心一つで必ずあなたをやみから解放して光の中へ移してくださいます。

水渡　紀久雄(みときくお)
1940年横浜生まれ。大崎中、日比谷高、東京大学経済学部卒。
電電公社入社、NTTコミュニケーションズ常勤監査役を経て、2006年退職。
川崎市在住。妻君子。



あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ　8・32)





イエス様の恵みと孤独からの解放

**神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。
また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださるという望みを、
私たちはこの神に置いているのです。
（2コリント　1・10）**

**神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださるという望みを、私たちはこの神に置いているのです。
（2コリント　1・10）**

私は小さいころに両親を通して聖書に書かれているイエス様のことを知るようになりました。しかし高校生になると、神様を知ることが怖くなりました。自分のわがままや思いが強くなり、神様のことよりも自分のしたいことを優先したかったからです。そのため、いつも心の内側では「うしろめたさ」を抱えながら生活していました。

「罪」とは何でしょうか？

ある日の日曜学校で、子供たちに罪ってなあに?と質問したことがあります。小学校低学年の子供は、「悪いことをすること」、また別の子供は「悪口やウソをつくこと、人のものを盗ること」と答えました。子供たちは、家庭や学校で教わって、何が悪いことかを知っているのです。

でも中には、次のような答えをした子供がいました。「罪は、イエス様のことを無視すること」という返事でした。これこそ、私が感じた「うしろめたさ」の原因でした。

たしかに日曜学校では、イエス様のお話をします。しかし、このような小さな子供が罪の本質に触れた答えをしたことには驚きでした。「罪」とは、私たちを造られた創造主なる主イエス様を無視して生活すること、つまり主を知らず、頼るべき方を知らない孤独な状態です。

イエス様を知らないこととは、どうして孤独なのでしょうか?このことを知るために、次の質問をしたいと思います。

「あなたは幸せですか?満たされていますか?心の平安はいつもありますか?自分の人生の終わりにも希望を持って死を迎えることができますか?天国への確信はありますか?」

これらの質問に私たちは何と答えるでしょうか。イエス様はこの地上での生活を通して、この世界に住む全ての人に、真のお答えを示してくださいました。

主イエス様とは、どのようなお方でしょうか。イエス様のなさったことを知り、イエス様に従



イエス様の恵みと孤独からの解放

うとき、私たちは「罪と孤独」から解放され、喜びと希望にあふれた人生を送ることができます。主イエス様こそ、私たちにとって唯一の救い主であり、いのちです。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。
(ピリピ　2･6～8,10,11)

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ　3･16,17)

ここで、「十字架ってどうして私のためなの?私と何の関係があるの?」と疑問を持つ方もおられると思います。

主イエス様は、私たちがこの地上に生まれたときから罪に定められ、罪しか犯すことができず、神に背を向け、逆らうものであり、自分中心の考えでしか生きることができない者であることを知っておられました。主なる神様の定めた律法に従わず、主との関係を持たないことこそ、「罪」であり、その罪をあがなうためには死をもってしてもあがないきれない負い目です。しかし天地創造の神は、御子であられる主イエス様を、この地上に遣わしてくださり、私たち一人一人が滅びることのないようにと、私たちの罪の身代わりとなって十字架で犠牲となってくださり、私たちの全ての罪を赦してくださったのです。

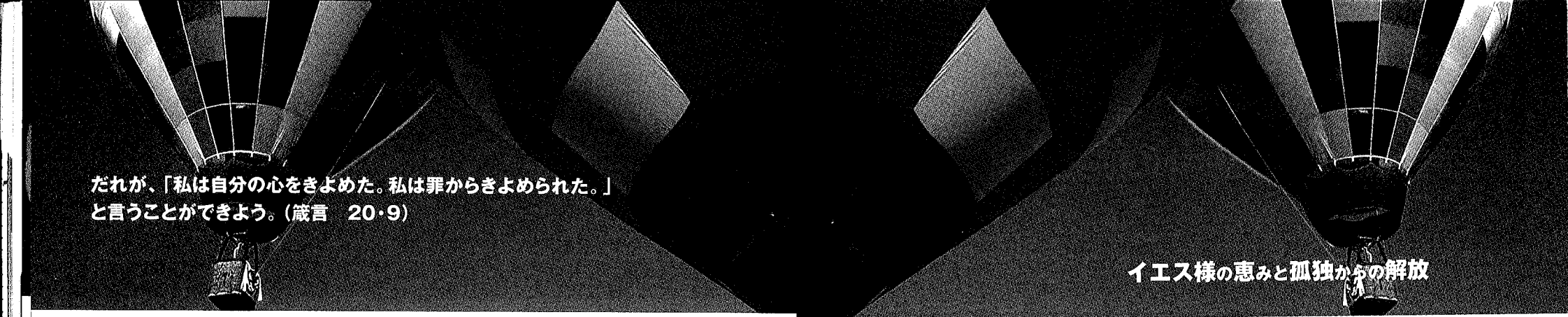
キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。(1ペテロ　3･18)

イエス様を知らなければ、この世の法律を守らないことが「罪」です。法律を犯した人は罰を受け、または何とかして「罪」から逃れようとします。しかし、本当の解決は得られません。私たちの全ての罪をあがなうため、十字架の上で身代わりとなって、いのちを捨ててくださった主イエス様に向かわない心は、罪の重荷から解放されることはありません。この地上を支配している悪魔は、十字架で私たちの罪のあがないを成し遂げてくださったイエス様に人々の目を向けさせないよう、あらゆるまどわしによって、私たちを攻撃してきます。しかし、イエス様の十字架によって私たちは赦されていることを素直に信じるならば、私たちは救われ、永遠のいのちを得ることができ、孤独から解放され、主イエス様の恵みと喜びを受取ることができます。

もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。(ローマ　10･9,10,13)

主イエス様との関係、交わりがどれほど大切であり、イエス様のくださっている恵みがどれほど大きなものであるかは、日々の生活を通して毎日教えていただけます。

さて私は、イエス様を信じる家庭で育ち、イエス様を信じる妻と結婚して5年が経ちますが、どんなに一生懸命親に従おうとしても、立派に家庭を治めようとしても、自分の力ですることは全く的外れであったことを知りました。特に結婚生活では、自分のわがままや自分勝手な思いが、即座に相手に伝わってしまい、隠すことができないからです。まるで鏡のように、自分で嫌悪するような行動を相手に対してしていることを自分で見てしまいます。しかし初めの頃は、まだ絶望していませんでした。一生懸命、頑張って仕事と家庭を両立することは、自分の務めであると考えていたからです。だから夫婦の間で一致は感じることができませんでした。「私たちの代わり



だれが、「私は自分の心をきよめた。私は罪からきよめられた。」と言うことができよう。（箴言　20・9）

イエス様の恵みと孤独からの解放

に十字架にかかって死んでくださった主イエス様が必要です」というイエス様に拠り頼む祈りが全くありませんでした。一生懸命でも、コンパスとなるイエス様のみことばに従っていなければ、全てが的外れです。そのような生活では、頼るべき方への祈り、喜び、感謝が無く、焦る気持ちと孤独感が募ります。

私たちは、「周りの人にいかによく思われるか、受け入れてもらえるか」という目に見える部分や感情や気遣いを大切にしてしまいます。この性質はどうすることもできません。イエス様を信じることで克服できることでもありません。イエス様を信じることは、人間的に何か偉くなることや、理解が進むことではないからです。私自身、イエス様の恵みによって小さい頃から聖書のみことばに触れる恵みをいただきましたが、これは勉強でも知識のためでもありません。みことばに照らされ、自分が罪人であることに気付かされるためだったのです。

イエス様は33年の間、この地上で人としての性質を持って生活され、私たちと同じ悩み、苦しみを経験されました。しかし「頼るべき方」である主であり、父なる神様に祈り、全ての重荷をいつも主にあずけ、お任せしておられました。

私たちも「頼るべき方」である救い主イエス様の十字架に祈ることができます。祈ることとは、正しく生きるためのものではなく、日々の小さな悩みや問題、苦しみも全て主に明け渡せるという恵みです。「自分は何もできません。どうか主イエス様が導いてください」と素直に祈れることは、主イエス様と共に生きることであり、孤独からの解放です。もう一人で頑張る必要はありません。私たちが正しくなることではありません。主イエス様に救われた罪人として、主のなさったことを喜ぶことだけです。

私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公儀を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。（ミカ　6・6〜8）

御名を知る者はあなたに拠り頼みます。主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てになりませんでした。（詩篇　9・10）

私たちは、まだ自分たちの力を信じて、主の救いを拒み、主を無視して生きたいのでしょうか。

わたしが正しい人に、「あなたは必ず生きる。」と言っても、もし彼が自分の正しさに拠り頼み、不正をするなら、彼の正しい行ないは何一つ覚えられず、彼は自分の行なった不正によって死ななければならない。（エゼキエル　33・13）

だれが、「私は自分の心をきよめた。私は罪からきよめられた。」と言うことができよう。（箴言　20・9）

イエス様の十字架の意味、そして今も生きて働いておられ、私たちの最善のためにご計画を立ててくださっている主イエス様のことを考えてください。

「義人はいない。ひとりもいない。」すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。（ローマ　3・10,23,24）

イエス様は十字架上で、このことを成し遂げてくださり、私たちを神に逆らう者から神の家族、子供としてくださいました。これは一方的に与えられた主なる神様からの恵みであり、このことを幼子のように受け入れ、信じるなら、私たちは救われます。今まで自分勝手に生きていたこと、「イエス様を無視した」生活をしていたことを、心から主に「ごめんなさい」と言うことができれば、私たちは、もうすでに主イエス様の家族とされているのです。

イエス様を信じるのに人の努力は全く必要ありません。ただ、自分の思いを主イエス



様に知っていただくこと、自分の罪を主に告白することが、解放への道です。

「罪」を犯す性質は、天国に行くまで残りますが、イエス様が私たちを「罪と死の力」から解放してくださり、救ってくださったことを絶えず感謝しましょう。次のみことばはすべての人に与えられています。

キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ローマ　8・2）

人は必ず死ぬことが定まっています。しかし、イエス様の前に悔い改めた人は、永遠のいのちに移されています。

私たちは、イエス様の十字架によって罪の力から解放されました。まだイエス様をご存知ない方、どうか自分の力で罪と死の暗い力と闘おうとしないでください。自分の力でこれらを断ち切ろうと頑張らないでください。それに打ち勝つことは、イエス様を信じ、従うことによってこそ可能だからです。

今日私たちには、選択する自由が与えられています。どうか主イエス様が成し遂げてくださった恵みの救いを選んでください。そして、いのちの御霊の原理によって、解放される喜びを知ってください。いのちの法則は、私たちが意識していなくても、確かに存在し、私たちを見つめ、支えてくださっています。そして毎日の生活の中で体験することができます。私たちの生活には、これからも困難や悩みが伴います。

しかし、それは、まさしくいのちの法則の現れであり、主イエス様の導きと、恵みと愛を知るためにどうしても必要なプロセスです。逃げるのではなく、そのときこそ、「主イエス様、導いてください」と全てを明け渡すならば、確かにいのちの法則によって守られていることを知ることができます。

十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあったのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。（コロサイ　1・20〜22）

私たちの心の動きを、生活のすべてを見つめておられる主イエス様に祈りましょう。私たちの罪を赦し、救ってくださるお方は、私たち一人一人のために十字架で死んでよみがえり、新しいいのちを与えてくださった主イエス様以外にはありません。だからこそ、安心して自分の弱さに絶望し、取り繕わないで、イエス様のみもとに出て行けます。自分の罪深さを知れば知るほど、主イエス様がそんな私たちを愛してくださっているという恵みに、心から感謝せざるを得ません。

私たちの全生涯はイエス様の前に明らかです。だから、今日、イエス様との出会いを求めていただければ、これからの人生は希望に満ちた歩みとなるでしょう!

主は、私の光、私の救い。だれを私は恐れよう。主は、私のいのちのとりで。だれを私はこわがろう。（詩篇　27・1）



その人は悪い知らせを恐れず、主に信頼して、その心はゆるがない。その心は堅固で、恐れることなく、自分の敵をものともしないまでになる。（詩篇　112・7,8）

和田周作
瀬ケ崎小、六浦中学、横浜市立金沢高校、神奈川大学工学部経営工学科、同大学院工学研究科経営工学専攻修士課程卒。ニュー・ディメンジョン・リサーチ社を経て、現在日本テキサス・インスツルメンツ（株）勤務。
妻／亮子さん
長女／めぐみちゃん、次女／まことちゃん





神の聖なる戒め

「モーセの十戒」12

ゴットホルド・ベック

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、
あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中に
あるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。
あなたの神、主であるわたしは、わたし神、わたしを憎む者
には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、
恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名をみだりに唱えてはならない。
主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな
仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子、娘、それに
あなたの男奴隷、女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる
在留異国人も。
11その七日目に、主が六日のうちに天と地と海、またそれらの中にい
すべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、
主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとして
おられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。
すなわち隣人の妻、あるいはその男奴隷、女奴隷、牛、
ろば、すべてあなたの隣人のものを欲しがってはならない。

出エジプト 20:1〜17

モーセの十戒の学びも、いよいよ最終回、「第十の戒め」です。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。（出エジプト　20・17）

主なる神の聖なるみこころは、いつも私たちの全生涯を包みこんでいます。私たちが自分勝手に動いているような生活領域、主なる神に隠していられるような生活領域は、何ひとつありません。

聖書の「十戒」は完全なものです。主は、私たちの人間関係も、活動領域も、力も、能力もすべてをよく考えておられ、それを導くために十戒をお与えになったのです。

人間が作った法律は、ただ人間の行為だけを罰します。なぜならば、人間は他の人の心の中の思いや考えを明るみに出して裁くことが不可能だからです。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」（1サムエル　16・7）

したがって人間の動機や思いを判定するのは、検事でも裁判官でもなく、主なる神ご自身なのです。もし、人間の裁きが人の心を裁こうとすれば、必ず、不法や不義、さらには嘘、偽り、偽善などがまぎれ込んでこざるをえません。

人間の心を創造された主なる神だけが、人間の心の奥底を見通すことがおできになります。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。（ヘブル　4・13）

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。（詩篇　139・1～6）

主なる神はなんと偉大なお方でしょうか。私たちの心の中にあるすべての思い、一瞬の内に心をよぎる感情、そのすべてを私たちは知ることができませんが、主にはその深みに至るまで、私たち自身が気がつかない奥底までも、主はご存知です。

主イエス様について次のように書かれています。

イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。（ヨハネ2・24、25）

「わたしは、･･･あなたの神、主である。」（出エジプト　20・2）

全知全能である神のこのみことばは、私たちの感情、思い、心の奥底の欲望など、私たちのたましいすべての上に厳然として響きわたります。主なる神の聖なるみこころは、私たちの思考、感情、意欲などのすべてを包んでいます。それは、私たちのまったく個人的私生活、つまり、一般の人の目には隠されていて私たちが秘密にしておきたいと思う領域の中さえも、神の目に明らかです。

人間の心の中には、どのような世界が潜んでいるのでしょうか。それは「強盗の巣」、暗やみの地下世界、つまり、どろどろした世界にほかなりません。

私たちはしばしば私たちの心の中で考えられていることを隠したいと思います。もしも私たちの心の奥底に動いているものがすべて一度に明るいスクリーンに映し出されたなら、それは大変なショックでしょう。私たちは驚きのあまり、確かにそれが自分の姿であるとは認識できないでしょう。

すべてを見通す神の目は、すべてのことを見ておられます。主はすべてをご存知で、主にとって隠されているものは何ひとつありません。

第十の戒めは、人間の心のもっとも奥底にあるものを表わしています。主なる神はただ単に、私たちの表に出た行動の裁き主、口から出た一つ一つの言葉の裁き主だけでなく、私たちの心の底にうごめくさまざまな考えやはかりごとの裁き主でもあります。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。（ヘブル　4・12）

ここでは、行為と言葉のもととなる「心」が問題です。

「悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。」（マタイ　15・19）

第十番目の戒めは、「悪い欲望が、あらゆる罪のもっとも深い根である」と言っています。

さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あ

なたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。

（創世記　3・1～6）

よく知られているところですが、ここでエバに、ついでアダムに心の欲望が目覚め、欲しいと思う気持ちが強くなり、禁じられているものに手を伸ばしたのです。事情は現代でもまったく同じです。欲望はあらゆる他の戒めを犯すことの大きな原因となります。人間は欲望によって支配されると、「欲望の奴隷」になってしまいます。

私たちは、多くの場合、「欲しい」と思うことだけをして、「欲しくない」ことはしたがりません。「欲望」が私たちの生涯の基準となり心を占めてしまうと、もはや神の聖なるみこころは基準とはなり得ません。

「他の人が持っているものをどうしても欲しい」という欲望は、盗みや姦淫や殺人を引き起こします。心の中に戦いの場があり、心の中で欲望を満たすための決定が行なわれます。心があああしたい、こうしたいと命令するのです。

人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。　　（ヤコブ　1・14、15）

「欲望」はただ単に個人生活の中で原動力となるだけではなく、社会や国民生活、国家の原動力となります。人間は他人が持っているものを持ちたいと思います。ある階級は別の階級が持っている利益を享受したいと思います。一民族は他民族が持っている支配力や経済力、豊かな生活圏を持ちたいと思います。

「欲望」はまた、火山のように爆発し、邪魔するものをすべてを溶岩で焼く尽くそうとします。国家の欲望と国家の欲望が妥協して結ばれた協定や条約は、火山の周りに張りめぐらされる木の柵にたとえられます。火山が静かな間は、美しい境界に見えますが、火山が爆発すれば、何の役にも立ちません。

他人のものを欲しがる欲望は、すべての人間を不条理な、恐ろしい姿に変えていきます。その結果、誰ひとり他人を信用しなくなり、不信はさらなる不信へと増幅していきます。

経済的、社会的、政治的生活は、今日では相互不信の上に成り立ち、その結果は人間関係における極度の不安となっています。私たちは神の聖なるみこころをないがしろにしました。ですから人間の心にある悪い欲が、有毒ガスのように世界の国をよごしたのです。

「あなたの隣人の家を欲しがってはならない。（出エジプト20・17）」という主なる神の権威あるみことばは、主のみこころを現わしています。この戒めは、もっとも深い根源にある人間の罪を示します。この戒めはあらゆる苦しみと悩みの原因を明らかにしているのです。

欲しがることはつまり、他人のものを持ちたがることです。隣人の家、妻、召使い、財産などを持ちたがることです。欲望はすべてのものに目を向けます。他人の家庭生活に入り込み、他人の社会関係や他人の物質的な所有物に立ち入ります。欲望は自分のものにして独占したがるのです。そして満たされない欲望の結果はねたみであり、このねたみから嫉妬が生まれます。嫉妬は自分の欲しいと思ったものを手に入れるためのあらゆる手段と方法を捜し求めます。悪い欲望の結果として、今日どれほど多くのねたみと嫉妬が広がっていくことでしょうか。

これらのものは、家庭、集会、国、世界などにおける共同生活を分裂させ、破壊します。ねたみや嫉妬によって動かされる者は毒をまき散らします。

ねたみと嫉妬とは、人と人との親しい関係を壊し、強く結びついていた絆をも断ち切ります。そして、イエス様のみからだである集会をも分裂させます。

この第十番目の神の戒めは、欲望が持つ恐ろしい力を認識し、その源を正しく見極め、神のみこころに対する敵としてきびしく認識するよう、私たちに警告しています。

結局、人間が抱くあらゆる悪い欲望は、主なる神に対する罪です。他人のものを持ちたいと思う者は、自分が持っているものに満足しません。つまり神に対して不平を言うことになります。主なる神を批判することになります。それは、主の愛と義を疑う態度です。

荒野にいるイスラエルの民は疑うようになり、いつも神に不平を言い、それによって主に罪を犯しました。

私たちが他人の持っている教育、才能、財産などをねたんで、自分も持ちたいと思うことは、造り主である神に対して、不平不満を言うことになります。

この第十番目の戒めは、私たちの罪のもっとも深い根を刺し通します。おそらく私たちは、今まで主の恵みによって犯罪を犯さなかったし、ひどい悪口を言わなかったかもしれませんが、しかし、私たちの心の底には、みにくい欲望が支配しているのではないでしょうか。

みにくい欲望は言葉や行ないよりも危険

です。なぜなら、それは知らず知らずのうちに心の中に発生し、長い間人の目に隠されており、しかし最後には言葉や行ないの中に正体を表わすからです。したがって、聖書は心の中にある悪い欲の恐ろしさを強調し、それに屈服しないように警告しています。

金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」　（ヘブル　13・5）

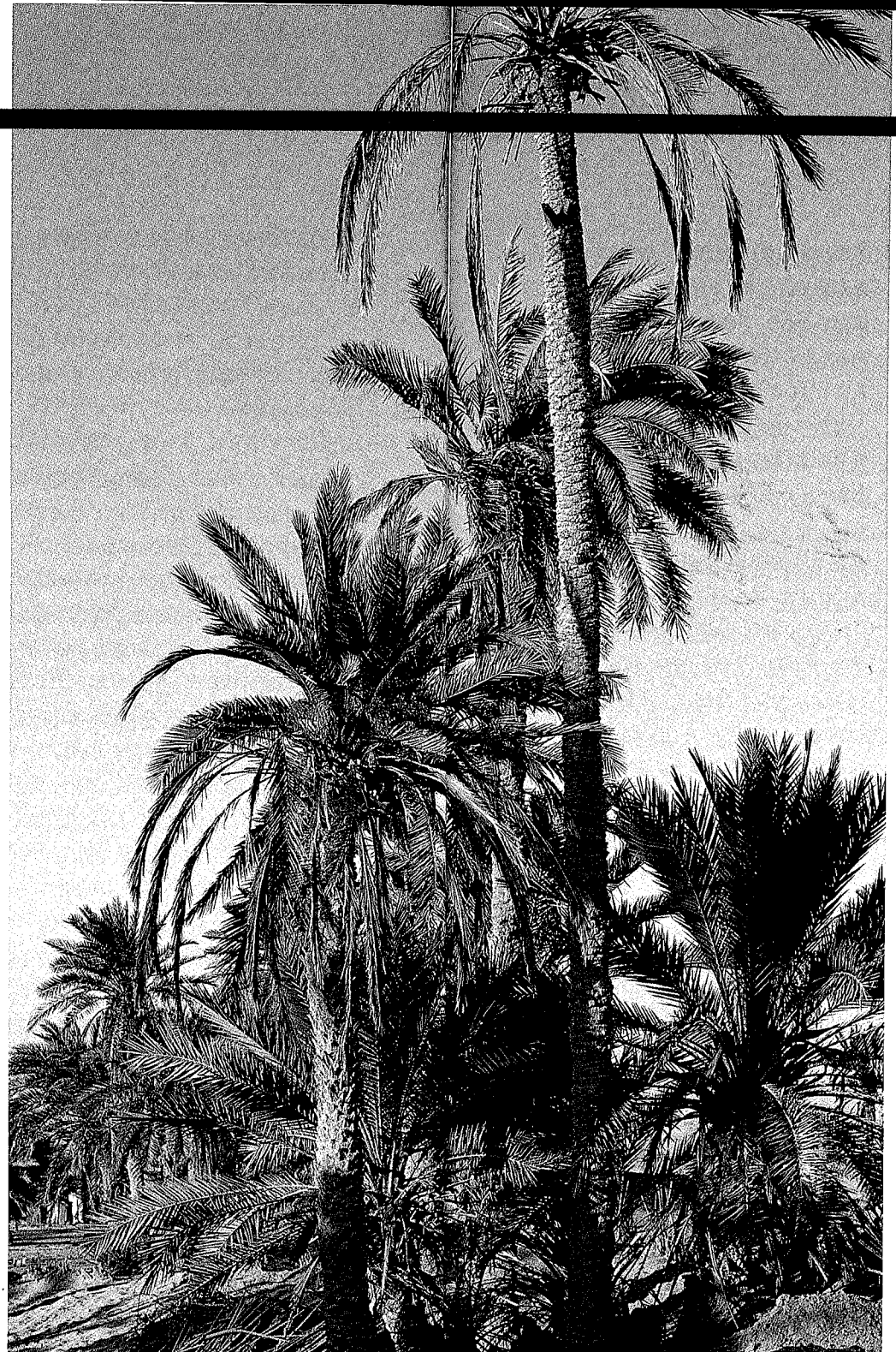
「私は欲しい」と魅惑的に、あるいは命令的に語る自分の心の独裁者から、信者として解放される手段は、ただ一つです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。　（ローマ　6・6）

人間の欲望は、主イエス様の死によって力を奪われました。解放された者として私たちはもはやこの欲に縛られることはありません。

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。

（ガラテヤ　5・24）



最後に聖書のなかでもっとも大切なみことばのひとつ、**「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。（ルカ18・13）」**というみことばをご一緒に考えてみましょう。

私たちは十戒を通して、主なる神の聖なるみこころを知ることができるようになりました。みことばの光によって、私たちの生涯のすべてが明るみに出され、私たちの心の奥底が明るみに出されました。

すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」

（ルカ　18・21）

その昔、ある若者は、十戒についてこのようにイエス様に答えました。私たちは同じように答えられるでしょうか。そのように答えられる人は一人もいないはずです。私たちが知っているのは、次のことです。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。　（ヘブル　4・12）

私たちにできることはただひとつ、ヨブ記9章3節に書いてあるように、**「たとい神と言い争おうと思っても、千に一つも答えられまい。（ヨブ9・3）」**と告白できるだけです。主の前には全面的な服従があるのみです。主の御前にへりくだり、白い旗を揚げる人は幸いです。

宮に上って、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ18・13)**」と言った取税人はこの態度を取ったのです。主は私たちから、自由で隠しごとのない罪の告白を聞きたいと願っておられます。私たちは聖霊を通して罪を示され認めることができるようになりましたが、それだけではなく、自分の唇を通して、罪の告白をしなければなりません。

主の御前に明らかにされた罪を、告白してください。取り繕ったり、言い訳をしたりしないで、ありのままの状態、あらゆる考えや不純を主イエス様に告白してください。もし私たちが罪を隠そうとし、覆いつくそうとすれば、悲劇的なことになります。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇　32・3～5)

ダビデのように告白する人は幸いです。

まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。　(詩篇　51・3～6)

私たちは信者として、「私が罪を隠さずに告白するならば、主は決して私をお見捨てにならない」という確信を持っています。放蕩息子が帰ってきたとき父親が受け入れたように、主なる神もまた、私を受け入れてくださるという確信です。

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ　1・8、9)

私たちはありのままの状態で主のみもとに行き、心の奥底を主に申し上げることが許されています。

主は私たちをご存知であり、すべてのことをご存知です。しかし、主は私たちが自分の罪を認識し、私たちの罪の負いめを告白することを望んでおられます。「私たちは、主ご自身に対して罪を犯しました。私たちは主なる神の聖なるみこころに対して罪を犯しました。私たちは主に、自分の意志また支配権を渡そうとしませんでした。私たちは私たちの罪によって、主なる神の愛を深く傷つけました。・・・」と。

主は、私たちの罪のために、十字架にかかられた主イエス様を見上げなさいと言われます。聖なる神は、すべての人を罪人として永遠の死に判定し、神の聖なるご臨在から追放し、地獄の暗黒に追いやられるべきとされながらも、この恐ろしい判決を、十字架上のイエス様のうえに下されたのです。私たちの身代わりとしての犠牲として。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。(イザヤ　53・5)

十戒を通して、私たちは、イエス様が担ってくださった重荷がどれほど恐ろしいものであったかがわかります。また、主イエス様が担ってくださった私たちの債務がどれほど大きなものであるかもわかります。十戒を通して明らかになった罪、また主なる神の御前に告白されたすべての罪は、神の小羊なるイエス・キリストのうえに置かれたのです。

その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

(ヨハネ　1・29)

私たちは、世の罪という重荷がどれほど重いものであったかを理解することはとうていできないでしょう。そしてまた、父なる神が主イエス様のうえに置かれた人類の不義と罪の下で、イエス様がどれほど苦しみ、悩まれたかも、私たちは決して理解できないでしょう。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。

(2コリント　5・21)

このみことばの中に測り知れないほどの深い苦しみが言い表わされています。主イエス様は父なる神のみこころを完全に行なってくださり、その苦い杯を最後まで飲みほしてくださいました。そして主イエス様は罪人のうえに置かれた父なる神の呪いをご自身のうえに受けてくださいました。主イエス様はご自身の尊い血潮を流してくださり、ご自身のいのちを捧げてくださいました。ですから、救いの道が開かれたのです。

モーセの律法によっては解放されることのできなかったすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。　(使徒　13・39)

私たちの罪の認識は、私たちを救ってはくれません。むしろ私たちの恐ろしい債務を知ることによって、絶望的な状態に置かれてしまいます。罪の自己欺瞞から目覚め、

自分が行なった罪のすべてがわかってしまった人は、絶望してしまい、生きることの希望さえ失うような悲惨な状態に陥ってしまいます。この世の罪は、あるいは裁判官の裁きを逃れることができるでしょう。しかし、主の目から見ての人間の罪は、絶対の裁判官である神からは絶対に逃れることはできません。

そしてまた、単なる罪の告白だけでは罪の重荷から解放されません。告白によっては、すでに犯した罪が犯さなかったことにはなりません。

そしてまた、告白することによっては、誰も自分の心の考えを洗い流すこともできません。単なる告白は、罪を思い出させ、神と人間の前で自分を責めることを強めるだけです。

大切なことは、ただ、主イエス様だけが、ご自身の尊い血潮によって私たちの罪を解放することがおできになるということです。なぜなら、イエス様が私たちの罪の身代わりに血を流してくださったからです。主の流された血潮は、私たちの罪をあがなうために、イエス様がご自身のいのちを捧げてくださったことの証明です。ですからイエス様は債務証書を無効にされたのです。

いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。（コロサイ　2・14）

これこそが、イエス・キリストによる救いの、圧倒的なすばらしい福音です。つまり主イエス様は、私たちが主に告白したすべての罪を赦してくださっただけでなく、消し去り、罪の債務から解放してくださったのです。

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

（イザヤ　44・22）

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」　（イザヤ　1・18）

主イエス様の血潮は、私たちの罪を完全に、徹底的に消し去ってくださいましたので、神の目はもはや私たちの罪を見ず、その罪を思い出すこともなさいません。

「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

（エレミヤ　31・34）

人間にとってもっともすばらしい経験は、主なる神の御前にひざまづき、「**神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。（ルカ18・13）**」と告白し、そして主が流された血潮のゆえに、「**子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。（マタイ9・2）**」という主のみ声を聞くことです。それを経験した人の生涯は、主の恵みを誉めたたえる生涯となります。その人は主を誉めたたえざるをえないのです。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。

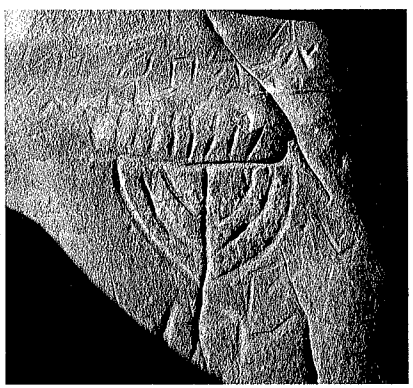
（詩篇　40・1～3）

罪の力の恐ろしさを経験した人、また十字架におけるイエス様の苦しみを見た人は、もはや罪を愛することができず、心の底から罪を憎みます。イエス様の愛が深く私たちを捕らえれば捕らえるほど、また、私たちがイエス様をさらにいっそう愛すれば愛するほど、罪は私たちにとって、いっそう憎むべきものになります。私たちはもはや罪に仕えることができませんし、仕えたいとも思いません。ただ、主を喜ばせたいと思うだけです。

主は私たちに「**あなたはわたしを愛しますか。（ヨハネ21・16）**」とお聞きになります。私たちはペテロと同じように、「**私があなたを愛することは、あなたがご存じです。（ヨハネ21・16）**」と心から言うことができるのです。私たちには、聖霊の力に頼って勝利が与えられます。私たちはもはや、欲望に支配されず、唇が清く守られ、不正を行なうことから守られます。

私たちは昼も夜も、「**御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。（マタイ6・10）**」と祈るようになります。これこそが私たちのうちに住む、聖霊の願いです。聖霊は、イエス様が始められたみわざを、主の再臨の日までに完成してくださいます。

永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行ない、あなたがたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。（ヘブル　13・20、21）



主のみ恵みと あわれみに感謝します

クラウス・ローゼ

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。　（詩篇　115・1）

神様は私の人生に介入してくださり、私を悔い改めへと導いてくださいました。そのおかげで、私は主イエス様が私の救い主であることを知ることができたのです。このことについてお話しさせていただきます。

私は1927年、ケーニヒスベルグ（当時の東プロイセン）で生まれました。この地は第二次世界大戦後、ロシア領となって、今はカリニングラードと呼ばれています。

私は裕福な家庭で大変甘やかされて育ちました。母は信仰を持っており、私と11歳半年上の兄のために、毎日祈ってくれました。父は大変温かな人でしたが、イエス・キリストに対する信仰がどうであったかは、よく分かりません。母は私の出産以来、重い病気にかかりました。1940年に大腸ガンを患い、1941年、私が14歳の誕生日を迎えた2日後に亡くなりました。

母の死は、私の人生に大変な衝撃となり、大きな痛みをもたらしました。兄は従軍していたので、私は父と二人で暮らしていました。

15歳の高校生の時、放課後、空軍の手伝いとして徴兵され、初めの2、3ヵ月の間に爆弾の破片で負傷してしまいました。1944年には非常時の卒業資格を得て入隊することになり、対ロシア戦、そして最終的には対アメリカ戦に参戦しました。この戦いで私は4度も負傷し、終戦の3週間前（1945年4月16日）に、銃弾が腕を貫通し、右腕と右手に障害が残りました。

故郷のケーニヒスベルグは、1945年1月にはロシア軍に侵略されていました。父はロシア兵に射殺されましたが、それは何人かで自分たちの墓を掘らされた後のことだったそうです。このことは終戦後、故郷の近所の方から知らされました。



クラウス・ローゼさん、マーグレット夫人と。

最後に負傷して入院した野戦病院は、米軍が運営していましたが、ロシア軍に引き継がれることになっていました。故郷を失った私は、兄夫婦が住んでいたベルリンにどうしても行きたいと思い、病院から抜け出してロシア軍の捕虜になることを免れ、ベルリンを目指しました。まず、ロシア軍の管理地域を突破しなければならず、私は夜陰に乗じて、霧の中、負傷した腕でエルベ川を泳いで渡りました。こうして長時間、さ迷いながらようやくベルリンの兄夫婦の家にたどり着いたのです。兄は私より先に、戦争捕虜の身から逃れて帰還していました。

しばらくして米軍で仕事が見つかりました。そこで初めてまともな食事にありつくことができ、他にも良い待遇を受けたので、私は「若い王様」にでもなったかのような気分でした。その後、働いていた米軍部隊が西に移ることになり、私も西ドイツに行くことになりました。

1949年春、この米軍部隊が撤収するまでの間、私はダルムシュタットという町で働いていましたが、その後失業して、住所不定の身となりました。転々と渡り歩くうちに所持品一切を盗まれてしまい、私はレンナーオート（ヴェスターヴァルト）という村の村長に助けを求めました。しかし、村からは3マルクしか出してもらえず、5キロ先のレーヘという村に行ったらどうか、と勧められました。そこには一風変わった、信仰深いクリスチャン達の療養所があり、もし私が信仰深そうにしてさえいれば、きっと面倒を見てくれるに違いない、ということでした。

私は「まあ、何もないよりはその方がマシかな」と考えて、レーヘに向かうことにしました。そこでは、その時は知るよしもありませんでしたが、私の人生の大きな転機が待ち受けていたのです。

さて、クリスチャン療養所にたどり着いた私は、所長の前で「信仰深く」振舞って

いましたが、本物でないことに、ほどなく気づかれてしまいました。それでも所長は私に同情して、療養所の施設再建の作業を割り当ててくれました。その作業場で私は、1人の信仰を持つ庭師に「主イエス様を愛していますか。あなたの罪は赦されていますか」と尋ねられました。私は「はい」と答えたものの、何かもやもやしたものが胸に残りました。続いて「では、一緒に祈りましょう」と言われた時は、全く気分が悪くなり、口ごもってしまって、何を言ったのか覚えていません。食前に、聖書のメッセージが短く語られ、祈りがささげられた時には、もう、いても立ってもいられない気分でした。夕方には若い男たちが全員、聖書の学びと祈り会に集まってきましたが、私は全く身の置き所がありませんでした。

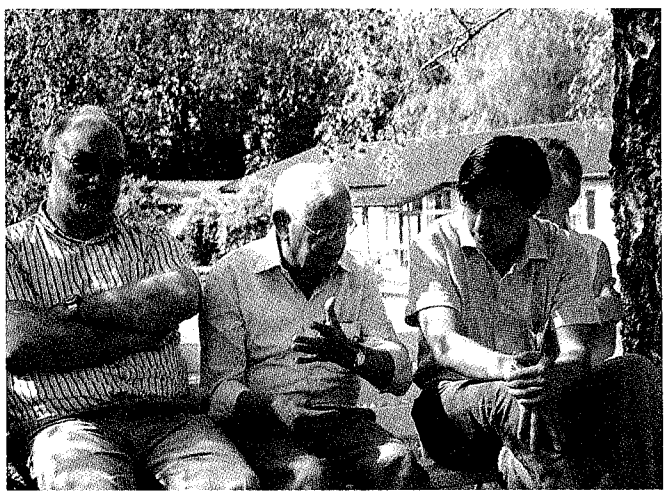
その時、すでに神のみことばが私に働き始めていたのだ、ということが今は分かります。

私は心の中に次々といろいろなことを思い巡らせて休まる暇がなく、夜も眠ることができませんでした。

はっきりとは覚えていませんが、たしか3日目か4日目のことでした。それまでは、ただ聞いていただけの「このイエス様」を、今度は自分のものにしなければ、と思わされたのです。そうでなければ、私はただの失われた人間であると・・・。

こうして幾度かの眠れぬ夜を過ごした後の、ある金曜日の早朝のことでした。皆が起きだす前に、私は小屋を出て植え込みに隠れ、ひざまづいて長い間、祈り、もがきました。すると突然、確信が与えられ、天の父なる神が分からせてくださったのです。「御子イエスは私の罪のために死なれた。それによって、すべての罪が取り除かれたのだ」ということを。

今日に至ってもなお、この時、私の心に広がった喜びと平安を、言葉で言い表すことはできません。私はすぐに立ち上がり、皆のところへ行って報告しました。「私のために死んでくださった御子を通して、父なる神が私のすべての罪を赦してくださった」と確信したことを。



よろこびの集いのひととき、木陰での交わりで「証し」を語るローゼさん（ドイツ・ミヘルスベルクで）。

皆の喜びは大きく、その時私は、自分が皆と同じ神の子どもとされていることを知ったのです。

しばらくして私はドルトムントに移り、信仰を持つ庭師の下で仕事を見つけました。この町で集会につどい、洗礼を受け、集会の青年会に入りました。ある日、一緒に路傍伝道をしていた友人に、私が主のもとに立ち返ったことを話したところ、その人から「あなたはすべての罪を告白しましたか」と尋ねられました。私は救い主にはすべてを告白していましたから、「はい」と答えました。

夕方、帰宅した私はもう一度、路傍伝道の際に尋ねられたことについて思い起こしてみました。そして、主イエス様に対しては「はい」と断言できるけれども、人々に対してはそうではない、と思ったのです。周りの人に話していない、良心のとがめる一つのことがあったからです。それは、かつて米軍の人たちと闇市場で不正行為をしたことです。私は人間の前にもこのことを打ち明け、きちんと処理しなければならない、と決心しました。

翌日、私は警察に出頭して、自首しました。警察の係官は初めのうち私の言うことが信じられず、頭が変になったのではないかと言われました。しかし、長時間にわたって電話で調べた結果、私が言った通りであることが明らかになりました。

2ヵ月後に裁判が開かれ、私はダルムシュタットの法廷に出向きました。裁判官は私に「なぜ自首したのですか」と尋ねました。そこで私は、自分の人生を主イエス様に明け渡したので、人間の前でも全てを清算したい、という趣旨の「短い証し」をしました。長時間にわたる審理の結果、私は2年間、抑留されることになりました。しかし、その日は自由の身としてドルトムントに帰ることが許され、後日下された判決で、ハーゲンという町で抑留されることになったのです。

私が出頭したとき、刑務所の所長は私が自由な身で到着し、自首したことをいぶかっていました。所長は私の書類に目を通した後、罪の告白に至った経緯を話すように言いました。それで刑務所長にも「短い証し」を話すことになりました。所長は抑留軽減の処置を取り、聖書を持ち込むことを許してくださいました。当時、これは特別な計らいでした。

監房には、他に2名の受刑者が入っていて、2人とも悪人でした。1人は売春斡旋者、もう1人は窃盗犯で、ことあるごとに私を嘲笑の的にしました。私が食前の祈りをしている間に、私の食べ物につばをはきかけたり、私が中庭へ出た折に部屋に残って私の聖書から何枚かのページを破り、巻き煙草の紙に使ったりしたのです。

私の心は大きく傷つき、イエス様に叫びました。なぜ、こんなことが起こされるの

か、分からなくなりました。主は私から離れてしまわれたのでしょうか？

後になってようやく分かったのです。主が私の中にある誇り、傲慢、自意識といったものをことごとく打ち砕こうとしておられた、ということが。

私は、自首したことによって、自分が少しでも主の目にかなう者になったかのような錯覚に陥る危険性があったのでしょう。主が私を訓練してくださったことに感謝しています。

当時、ドルトムント集会のビルケンフェルトという方が、私の面倒を見てくださっていました。彼は私にとって、霊的な父親とも言うべき存在でしたが、次のみことばを示してくださいました。

「主はその愛するものを懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。

さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル 12･6～11）

このみことばを正しく理解するようになるまでには、しばらく時間がかかりました。

1週間後、2人の受刑者に受けた仕打ちを報告しないうちに所長に呼ばれ、「ここはあなたにふさわしい所ではありません。ゲルゼンキルヒエンに移り、軽減された刑に服しなさい」と告げられました。

思いもかけなかった転機が訪れたのです。日曜の午前はドルトムント集会に行き、夕方戻ってくればよい、ということが直ちに許可されました。しばらくしてから、ビルケンフェルト兄弟が私のために減刑嘆願書を書いてくれました。ここでも、イエス様は介入してくださったのです。わずか1週間以内に許可が下り、私は釈放されることになりました。刑期は3分の1に短縮されました。

後日知らされたことですが、判決が下されたにもかかわらず、公式手続き上は前科がつかない取り扱いになったのです。当時私が関わった事柄は、米軍との関係で起きたことなので無効とされたのでした。このように主はすばらしい方法で、そこから先の私の人生の道を平らにしてくださったのです。

釈放されて後、ハイランドという信仰を持つ人の家具屋で働くことになり、ゲルゼンキルヒエン集会の青年会で協力させていただくことになりました。そこで、妻のマーグレットにも出会い、彼女を愛するようになり、1953年に結婚しました。

以来、共に毎日主の恵みと祝福を体験させていただいてまいりました。4人の子供、娘が1人と息子が3人与えられました。ただ主の恵みの故に、子供たちは若いうちに主イエス様を救い主として受け入れることができました。

私たちにとって、大きな祈りの課題は「11人の孫が主を信じる道からそれずに、誰一人として失われないということ」です。

全能の父なる神のみ恵みとあわれみにより、主の愛する御子のうちに私は永遠なる救いを見出すことができました。心から主に感謝し、主をほめたたえます。

■

この証しは2006年6月、ドイツよろこびの集いのひととき、木陰で持たれた小さな交わりの場で語られたものです。ローゼさんは後日、その内容を原稿にまとめてくださいました。（訳 久田倫子、和田宗勝）。

古きは過ぎ去り、見よ、すべてが新しく

―世紀を生きた母（吉屋サキ）の信仰の証し

山本 孝子

元旦のたびに繰り返される父母の会話

「これは私が子供の時から信じている日本の神様です。」「お母さん、日本の神様とか外国の神様とかいうのはないんだよ。神は唯一、ただお一人、地球を含めてこの大きな宇宙、人間を含めてすべての生物、そして顕微鏡でも見えないような微生物、すべてのものをお造りになられた方が神です。お母さんが拝んでいるのは人間が木や金属で造って神と呼んでいるものなんだよ。本当の神様ではないんだよ。」「いいえ、そんなことを言うと、ばちがあたりますよ。」「そんなものに、ばちなんかあてる力はないよ。どうして造られた人間が自分を造ってくれた神を造ることができるのかね。子供だって親を造ることはできないでしょう？」「お父さんは本当に無神論者なんですからね。」「いや、唯一の神になら僕は頭をさげるよ。手も合わせるよ。でも、人間が造って神と呼んでいるものには、手を合わせません。」

母は泣きそうな顔で、神棚の前に立って手を合わせています。「一年に一度だけでいいから、とお願いしているのに…。これは1月1日の大事な行事、家長である主人の仕事です。女の私のすることではないのです」とつぶやく母。泣きながら思い切り打つ火打石からは、黄色い火花がパチパチとあたりに散ります。その火花は、まるで母の心の中にも散っているかのように、子供の私には思えたのです。これが幼い頃からの私たちの家の元旦の朝の出来事でした。

母は歩いている時、神社と見れば何が祭ってあるかに関係なく、どこでも礼をしてお賽銭をあげる人です。お墓へ行くと、まるでそこに亡くなった人が生きているかのように話をするのです。仏壇の前でも同じです。ある時、私は聞いてみました。「お母さん、お盆て言うのは何の日ですか?」「それは、亡くなった方が、地獄の釜の蓋を開けて、この世に帰って来る日ですよ。」「えっ?



孫やひ孫に囲まれて。中央が山本孝子さんの母、吉屋サキさん。後方右端、山本さん。

亡くなった人は地獄のお釜の中で煮られているの？」思わず私は聞き返してしまいました。母はまた、死のことを言うと、「縁起が悪い」と嫌がるのです。「シ」という発音さえも嫌がり、「4」という数字とも関係を持ちたくないのでした。

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。（エペソ 4・18）

あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。（コロサイ 2・8）

人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、…（エペソ 4・14）

いくらお経を読み、坊さんの話を聞いても、母は死の恐れから逃げることはできませんでした。その母がある時言いました。「孝子、私はいろいろ考えたけれど、私の葬儀は貴女の主人の時と同じようにしてくださいね。涙一滴流さない娘を見て、初めは何とクリスチャンは冷たいのかと思ったの。でも、皆さんの晴れ晴れとしたお顔で、何か私の知らないものがそこにあると思ったわ。」「でも、お母さん、イエス様を信じなければね。」母はじっと考えているようでした。

坊さんへの疑問

ある日、母は言いました。「孝子、私は何と長い間だまされていたのでしょう。」「えっ、だれに?」「あの坊さんにですよ。」私はびっくりしました。その坊さんは毎週家に来て母に教典を教え、写経をして、その後お酒のついたお盆に運ばれた食事を済ませ、母から白い封筒をもらって帰るのです。

家の門を出る時の姿は淋しげで、哀れっぽく見えました。母は尊敬しているように見えましたが、実はそうではなかったのです。私のところに来てくださる宣教師の方や、主イエス・キリストにある大勢の友人の方々と、あの坊さんとの違いを母は見たのです。面と向かっては、だれも言いませんでしたが、どんなに皆さんが母の救いのために祈ってくださっていたか、私は知っています。

お経をどんなに唱えても、死の問題は何も解決されなかった、いくらお金をあげても何も役に立たなかった、喜んだのはあの坊さんだけだった、私はだまされていたのだ、と母は気がついたのです。

坊さんの話では、亡くなった人はお墓の中にもいるし、仏壇の中にもいて子孫を見守っている、地獄の釜の中にもいるそうだし、草葉の陰にもいる、と言います。まるで、ミミズかコオロギのように先祖を考えています。そして、先祖を良いところへ行かせるためにはお金が要ると言います。先祖は何を買うのでしょう。死についても答えはなく、結局は諦めるしかない、それまで聞かされてきた話は、みんなウソだ、と母は思ったのです。

いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。 **(2 テモテ 3・7)**

坊さんに失望した母は、一方で「あのキリスト集会の方々のような輝いた人になりたい」という思いを与えられ、夢中で聖書を読み始めました。読書の好きな母には楽しいことだったでしょう。でも、聖書のみことばを受け入れるまでには、長い道のりがありました。

罪を認め、信仰へ

人間はだれでも、死後に神のさばきを受けるということを、なんとなく感じとっているのではないでしょうか。**「わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」(ヘブル 10・16)**と聖書にあるように、神は人の心に律法を書きつけてくださっているからです。自分は悪いことはしていない、と言いながらも死が怖いのは、そのためだと思います。

罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。
(ローマ 6・23)

人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている…
(ヘブル 9・27)

母は、死が罪から来るということを知りませんでした。永遠のいのちがあることも知りませんでした。そして、「キリスト教はいやね、罪、罪と言って。私は何も悪いことはしていません」と強がりを言っていました。はっきりと罪を認めたくなかったのです。

でも、罪を認めざるを得ない日が来ました。母がオランダに住んでいる末娘の敬子を訪ねたときのことです。

「敬子と一緒にベルギーに行ったとき、道端にイエス様が十字架につけられている石の像があったのよ。頭をうなだれ、両手に釘を打たれて、イエス様お痛かったでしょう。お苦しかったでしょう。そのお姿を見ていたら、この方をこんなに苦しめたのは私の罪だということが急に分かったの。私は申し訳なさと感謝とで胸がいっぱいになって、涙がとまらなくなってしまったのよ。イエス様、ごめんなさい。あなた様を無視して何十年この世の神を拝んでいた私のような罪人を、命がけで赦してくださったイエス様、ありがとうございます。こう言って私はベルギーの町を泣きながら歩きました。」

母のこの話に、私は胸を打たれました。母は、十字架につけられたイエス様を天に仰ぎ見て、はっきりと自分の罪に気がつき、悔い改めないではいられなかったのです。ほどなく母は、信仰を告白しました。

「孝子、私はイエス様を信じることにしたわ。私に真の神とイエス・キリストを教えてくれて本当にありがとう。」

私は夢を見ているようでした。あまりのうれしさと驚きで胸がいっぱいになり、机に伏して泣きながらイエス様の限りない愛に感謝しました。

母はこうも言いました。「思えばイエス様は65年もの間、私を待っていてくださったのね。私は5歳くらいの時、近くの教会の日曜学校に通っていたのよ。そのことをずっと忘れていたけど、最近思い出したの。クリスマスも楽しく皆で賛美歌を歌って、聖書の話を聞いて。そうそう歌ってみるわ。」

楽しそうに『主、われを愛す』を歌いだした母に、私も声を合わせました。まるで



白寿を記念して、吉屋サキさんが入院中に、ある画家が描いたデッサン。

夢のようでした、母と手をとって共に主イエス様を賛美するなんて。イエス様の限りない愛と忍耐を思い、母と二人で泣きました。長い長い道程でした。イエス様ありがとうございます。

仏壇を焼く

私は母がその後、仏壇の扉を閉めていることに気がつきました。仏壇を焼くことを勧めると、「これはもう仏壇ではない。本箱にしている」という返事です。仏壇ではないのだから、焼く必要はない、焼きたくない、という気持が伝わってきました。と同時に、“この世の霊”の働きを感じました。先祖の振りをして「私を拝め、私を拝め。さもないと、お前の家を呪うぞ。何か悪いことが起こるぞ」と母を脅かしてきた“この世の霊”が、かつては「はい、拝みます。家族をお守りください」と従っていた母を、そう簡単に手放すはずがありません。私は無理強いする

ことを控え、イエス様が「その日」を備えてくださることを信じて、祈りました。

待ち遠しい5年が経ったある日、母は言いました。「イエス様に祈っていると、あのカラになった仏壇の中から、だれかがじっと私を見ているの。気味が悪いから、やっぱり燃やしてください、なるべく早くね。」

うすら寒い初冬の軽井沢の山の上で、仏壇は、赤い先の割れた悪魔の舌のような炎に包まれ、灰になりました。母の信仰の邪魔をするものが消えました。私たちは賛美歌を歌って、勝利の主に感謝しました。

母は新しい人に変えられました。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。　(2コリント 5・17)

暗黒の死の陰の谷間に、望みなく座っていた母は、光の中に呼び寄せられ、罪赦されて、永遠のいのちをいただきました。もうさばかれることはありません。死への恐怖はとり去られました。母を取り巻いていたこの世の神々は逃げ去り、唯一の神の愛だけが母を取り巻きました。母はこの世の神々の支配から、主イエス様のご支配の下に移されたのです。ハレルヤ。

母、吉屋サキは102歳3ヵ月の地上のいのちを終えて2006年5月30日にイエス様のもとに招かれました。

私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう。　(詩篇 104・33)

主に歌え。主にほめ歌を歌え。そのすべての奇しいみわざに思いを潜めよ。　(詩篇 105・2)

罪に滅びゆくみじめな私を、十字架の血潮で、主は救いたもう。

罪も汚れも、ぬぐい去られて、主の御前に立つこの喜び。

主イエスに背を向け、逆らい続けた、罪の私をも、主は愛したもう。

恵み降り注ぐ、救いのみわざを、心を一つに、たたえて歌おう。

(日々の歌 128番)

1927年横浜市生まれ。日本女子歯科医専卒、東京医科歯科大学歯列矯正学教室に在籍、米国カリフォルニア州ドクター・リケッツ研究所などで研修、オランダ・ハーグ市で学校歯科医、東京目黒区と長野県軽井沢町で診療所開業。1987年退職。

天国で会いましょう

新井 稔

(2006年5月22日、岐阜県・メモワール各務ヶ原で行われた葬儀で、参列者に配られた本人の「証し」の要約です。)

本日は私、新井稔の召天式にお集まりくださいまして、ありがとうございます。

私は16年前、妻、順子の病気と召天を通してイエス様に出会い、これまでの自分勝手な、確信のない人生から、平安な人生へと変えられました。イエス様に導かれて歩む人生がいかに幸せであるか、皆様にぜひ知っていただきたく、「証し」をお伝えして、お礼の言葉に代えさせていただきます。この文章を皆様が読まれる頃、私は天国でイエス様と顔と顔を合わせてお会いしているはずです。(イエス様との出会いについては、キリスト集会発行の『光よあれ(6集)』に書かせていただいております。)

イエス様が私たち家族のために手を差し伸べてくださった救いの計画の始まりは、1989年、妻のがんという辛く悲しい試練でした。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。　(ヘブル 12・5〜7)

イエス様は順子を愛し、私たち家族を愛していてくださったゆえに、試練を通して、滅びの道から救い出してくださいました。まず順子を、イエス様を信じる者へと変えてくださり、1989年12月10日に永遠の故郷、天国へ召してくださいました。その時、子どもたちはまだイエス様を知りませんでしたが、イエス様は悲しみに打ちひしがれていた子どもたちのことも心配してくださり、順子の兄や姉、周りの多くの方々を通して支え、育んでくださいました。

わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。　（ヨハネ 14・18）

みことばのとおりでした。その後、1998年3月6日に息子の裕一が母親のいる天国に引き上げられました。人一倍母親っ子だった裕一をあわれんでくださったのでしょうが、そのみこころにも気づかず、私は突然の出来事に「イエス様、なぜですか!」と叫んでしまう不信仰な者でした。

まだイエス様のことをよく知らない娘、千穂にとって、弟を失ったショックと悲しみは、いかばかりだったかと思います。そんな娘をどう慰めればいいのか、なす術のない惨めな父親でした。しかし、イエス様はそんな者を見捨てられることもなく、かけつけてくださったキリスト集会の方々と共に、裕一の壊れたからだを囲む祈りへと導いてくださいました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。　（エレミヤ 29・11）

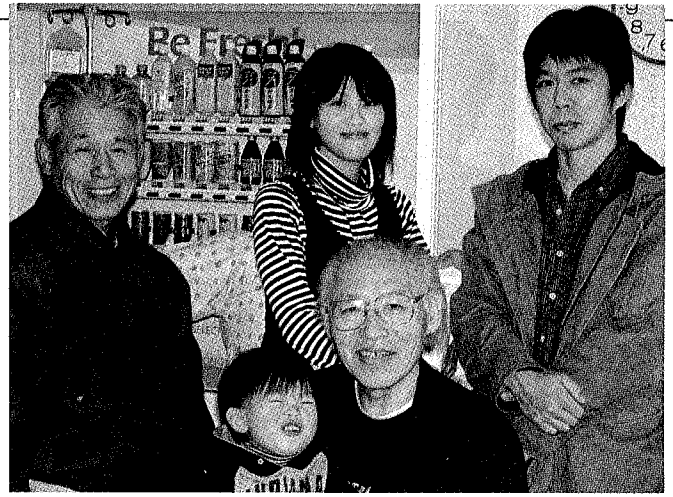
裕一の死は災いではない！イエス様が平安と将来と希望を与えてくださる！裕一のことを一番よくご存じのイエス様が、再び失うことのない永遠の喜び、幸せの中へ移してくださったのだ、そんな思いが与えられ、少しずつ悲しみが癒されていきました。そして、いつしか平安を取り戻し、イエス様の導きを感謝できるように整えられていました。

私はイエス様に救われて、生き様が変わりました。イエス様を信じ、イエス様に導かれて歩むことこそ、最も幸せな人生であると確信するようになりました。

イエス様は娘、千穂の救いについても導き続けてくださいました。梅田勝くん（千穂の夫）との出会いもイエス様の導きでした。私たち親と娘は、二人が出会う一年ほど前から心を合わせて「愛し合い、信じ合い、助け合い、生涯寄り添うことのできる人をお与えください。」と祈っていました。その祈りをイエス様は聞いてくださり、出会いから結婚へと導いてくださったのです。二人には2003年12月1日に皓亮（こうすけ）、2005年12月1日に葵（あおい）の二人の孫が与えられました。小さな目、耳、口、おもちゃのような指や爪、髪の毛一本までもイエス様が造られ、組み立てられたのです。イエス様の奇蹟そのものです。

それはあなたが私の内臓を造り、母の胎のうちで私を組み立てられたからです。私は感謝します。あなたは私に、奇しいことをなさって恐ろしいほどです。私のたましいは、それをよく知っています。　（詩篇 139・13、14）

イエス様は、私の願ったすべてのことを聞きとどけてくださいました。背後には、いつもいつもキリスト集会の方々の祈りがありました。ただただ感謝の思いでいっぱいです。



長女、千穂さんのご家族に囲まれて。手前、お孫さんを抱く新井さん。

そして今回、イエス様は私自身に病を与えられました。2005年12月半ばから身体の変調を感じるようになり、翌年1月5日検査入院。主治医にはすべてのことを教えてくださるようにお願いしました。すい臓がんの4期で肺に転移があり、手術は不可能、抗がん剤を使っても長くはもたないでしょう、と言われました。でも、心は不思議なほど平安でした。16年前、妻の肺がんが宣告された時は、真っ暗闇の奈落の底に突き落とされたような絶望感でしたが、今回は全く違いました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。　（ヨハネ 14・27）

この平安はイエス様がくださったものだと思いました。同じ平安を娘にも与えてくださるに違いない、そう確信しましたので、ありのままを話すことができました。

たった一人の娘を、愛しいと思わない父親がいるでしょうか。残された娘の将来を心配しない父親などいるでしょうか。娘とて父親との別れが悲しくないはずはありません。しかし、イエス様は、みことばの約束どうり、娘にも私にも平安と将来と希望を与えてくださったのです。

すべてのことを働かせて益としてくださる（ローマ 8・28）と約束してくださったイエス様は、私の身に起きたことも、最終的には益としてくださるに違いありません。

娘のこれからの人生も、様々なことがあると思います。辛いことも苦しいこともあるかもしれません。しかし、イエス様はどんなことがあっても娘のことを愛し続けてくださり助けてくださいますから、これに勝る喜びはありません。すべてのことをお委ねし、すべてのことに感謝します。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について，感謝しなさい。　（1 テサロニケ 5･16～18）

人には必ず死が訪れます。しかし天国は永遠です。大切なのはこの世の命よりもイエス様を信じ、永遠の命にあずかることです。そのためにイエス様は、私たちの身代わりとなって十字架上で死なれ、信じる者の罪を赦してくださったのです。そして3日後によみがえり、死を滅ぼされ、永遠の命をお与えくださったのです。

イエス様を信じ、罪赦された者にとって、肉体の死は天国への入り口です。そして、私たちはやがて、イエス様の再臨とともに栄光の身体に復活し、祝福に満ちた神の国で愛する人たちと、いつまでも共に生きることになるのです。

私にとって、62年の人生は、ほんとうにすばらしいものでした。悲しかったことも、辛かったことも、かけがえのないものばかりです。イエス様が共に歩んでくださったからです。そして皆様の祈り、また皆様との出会いと交わりがあったからです。

私、新井稔の肉体は死にました。でも私の霊は天国で今も生きています。皆様とも、ほんの一時的な別れです。ですから、どうか悲しまないでください。

「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」　（黙示録 21･3、4）

皆さんと、また天国でお会いしたい。それが私の切なる願いです。

1943年岐阜県生まれ。上宝第三小学校･中学校、県立高山高校卒業後、東芝クレジット（株）入社。名古屋支店営業部長。2004年退職。2006年5月18日召天。

私が苦しみの中からお願いすると主は答えてくださいました

高橋 義矢

私は1978年、クリスチャンの両親の長男として生まれました。生まれたときから教会に通っていました。そして、この天と地は神様が創造されたもので、私たち人間も造られたこと、二千年前にイエス様が地上に来られ、私たちの罪を赦すために死んでくださったことなどを、疑うことなく信じていました。住まいが父方の実家のお寺の敷地内にありましたので、お寺の庭から毎週日曜日に教会に集っていました。

私が中学1年生の時に両親がキリスト集会に集うようになりました。その頃から私は友人とのつきあいなどで礼拝に行かなくなり、徐々にイエス様から離れていきました。でも、両親が毎回喜んで集会に集い、喜んで帰ってくる姿を見て、何か今までと違う感じを抱きました。

すべてが順調だった私でしたが、高校を卒業してから大きなことが起こりました。将来の夢である看護師になるための学習に挫折したことです。ギリギリの成績で入学した私は、勉強や実習について行けなくなったのです。生きていることが辛くなりました。仲間に悩みを相談しても解決は得られず、この現状から逃げたいと思い、学校も休みがちになりました。そして2学期の途中で止めることになり、夢も消え失せて真っ暗闇でした。

このような状態の時、唯一楽しみな場所、心が安まり慰められる温かい場所が、キリスト集会でした。日曜日に集会に行き、賛美を聞くと、からからに渇いた心の中に神様の愛が溢れるように入ってきました。本当に慰められるひと時でした。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。
（詩篇 55･22）

イエス様から離れては生きていけないと思いました。しかし自分勝手な思いが人一倍強い私は、この世の流れに敏感で、信仰を持ちながら、この世と調子を合わせて生きるようになりました。

学校を止めて1年、やはり医療職に就きたいという思いは変わらず、救急救命士を目指そうと思い、専門学校に入学しました。今度こそ挫折しないように努めよう、と思いました。入学して2ヵ月後に妻の早苗が妊娠しているのが分かりました。19歳でした。

私はこの世の基準からしか物事を見れなくなっていました。当時は自分の犯した罪に、心の目が開かれていませんでした。私たちは結婚してから、私は学生、早苗は仕事をしていました。自覚も責任もない、みじめな夫であり父親でした。

そんな私も、イエス様の憐れみと多くの支えによって、1年後には救急救命士の資格を取得することができました。就職でも一度は挫折しましたが、今の消防署に就職することができました。6ヵ月の厳しい寮生活を終え、消防士としての仕事がスタートしました。救急救命士の資格を持っている私が期待した配属は救急隊でしたが、イエス様が用意されていたのは消防隊でした。6ヵ月の消防学校では火災消火の訓練だけでしたが、一番恐れていた現場に行くことになりました。目の前で炎があがり、火事現場では怒鳴り声の中で活動し、自分には耐え難いものでした。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1 コリント 10・13)

イエス様、もう耐えられません、早く脱出の道をくださいと心の中で叫んでいました。そんな時、主は一つの大きなことを私にお見せになりました。それは集会に集っている友人の交通事故でした。彼も私に似て、この世での楽しみや生活を大事にするタイプでした。その彼が、事故で意識不明の重症が数日続き、意識が戻っても脳にダメージがあり記憶さえも失っていました。私のことも忘れていました。

でも、一つだけ彼は大きなものを得ていました。それは、イエス様が大好きになり、この世ではなく主をまっすぐに見上げる者へと変えられていたことです。そんな彼の、イエス様だけを見て喜んでいる姿を見て、私自身の信仰について考えさせられました。

いつまで経っても信仰の確信がなく、宙に浮かんでいるような根っこのない信仰から脱皮したい、と強く思うようになりました。仕事の休みの平日に春日部の家庭集会に行った時、お話をされる方を通してイエス様が私に語ってくださいました。人生には二つの生き方がある。一つはこの世をすべてとして生きる生き方、もう一つはこの世は過ぎ去るもので、さらに上の天国でイエス様と共になることを目標として生きる生き方である、というお話でした。私はこの世を愛して生き、イエス様にも祝福はもらいたい、という両天秤をかけていました。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。 (1 ヨハネ 2・15)



ドイツよろこびの集いに家族で参加したときに、ツークシュピッツェの山上で。

それまで私は、この世とイエス様をうまく調和して生きていくことを考えていましたが、それはできない、ということが、はっきり分かりました。

あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

(マタイ 6・24)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

次の日、バイクで仕事に行く途中、イエス様を生まれたときから知りながら、この24年間自分勝手に生き、都合のいい時にだけイエス様にすがっていた私をも愛してくださり、十字架にかかり死んでくださった事実に胸を打たれて、涙が止まりませんでした。

その後も辛い状況は変わりませんが、イエス様はいつも私を背負ってくださっています。心配してくださいます。火災の現場でも、イエス様は私に必要な勇気を与えてくださいました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。 (イザヤ 41・10)

その後、2年間の消防業務を終えて、念願の救急隊に配属になりました。すべての悩みは終わったかに思いましたが、なんと今まで以上の苦しい日々が始まりました。人を助けることの難しさ、思い描い

ていた理想の活動と実際の現場との違い。自分はもっとできると思い、自分の持っている優しさや応急処置の知識で、多くの人を助け救うことができる、まだ歴史の浅い救急現場のこれからを引っ張っていこう、と傲慢になっていました。でも、自分は本当に何もできない者と気づかされ、砕かれました。看護学校の時と同じように気分は落ち込み、仕事に行くことが辛くなり、また続けることができないのかと思い、この状況から逃げ出したい思いでいっぱいになりました。

春日部市での日曜礼拝と家庭集会だけでは足りなくなり、みことばを求めて関東圏の家庭集会に参加させていただきました。 多くの方が話を聞き、祈ってくださいました。そして、いつも隣で祈り、共に聖書を読んでくれる早苗がいました。ボロボロになっている私のために祈り、ずっとそばに居てくれました。今まで夫婦の関係について深く考えたことはありませんでしたが、早苗を通して夫婦が一つになる必要を気づかされました。また、祈りの中で進められる集会の結婚式を、西軽井沢国際福音センターで見て、結婚についても示されることがありました。結婚生活を軽んじ、自分の欲のままに歩んできた罪を、結婚6年目にして「イエス様、ごめんなさい」と夫婦で共に悔い改めることができました。

そして家庭集会でミンヘンさんと話していた時、ドイツよろこびの集いに参加を勧められ、家族でドイツへ行くことになりました。ドイツよろこびの集いは私の人生を大きく変える1週間となりました。大自然の中での賛美と聖書のお話、観光、何よりも大きかったのは、イエス様だけを見上げ全てを捧げているドイツの方々（シュベスターさんたち）との出会いでした。それは何も持っていないようですべてを持っている、イエス様と共にいるということだけで内側から喜びが溢れ出ている、その姿を目にして、これこそ本物だと思いました。本当にすばらしい1週間でした。

その集いに2年連続、家族で集うことができました。2年間自分自身はボロボロでしたが、イエス様を賛美したいという思いはどんどん強くなってきました。集会の多くの方の祈りに支えられ、仕事の試練からも解放されていきました。過酷な現場も多く、辛く苦しいときもありますが、いつもイエス様の揺らぐことのない土台の上に立ち、イエス様を待ち望みたいです。

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

（ピリピ 3・14）

1978年大阪市生まれ。成南中学校、電通大高校、大阪府立千里看護学校（中退）、神戸医療福祉専門学校卒。越谷市消防本部谷中分署・第2中隊救急隊（救急救命士）、2006年より埼玉県立大学非常勤講師。

Information Box
[インフォメーション・ボックス]

● バンクーバー

● シアトル

● デンバー

● オクラホマ

アメリカ巡回、「福音と交わり」の旅

キリスト集会の方々が2006年7月、アメリカ各地を巡回して福音を語り、交わりの時を持ちました。一行は日本から参加した岩崎洋二さん、直美さん夫妻、和田芳明さん、ヒロ子さん夫妻、光藤英彦さん、綾子さん夫妻、藤田匡さん、信子さん夫妻、清水靖子さん、藤田明子さんと、ロサンゼルス在住のジェニファー藤田さん（明子さんの娘）の11人。訪問したオクラホマ・シティ、デンバー、シアトル、バンクーバーの4都市では、家庭集会が開かれ、日ごろキリスト者同士の交流に乏しい現地の方々にとって、霊的に満たされる貴重な時となりました。オクラホマ（10～12日）ではリーディ三津乃さん宅に17人、デンバー（13、14日）ではグラハム喜代子さん宅に11人がそれぞれ参加。シアトル（14、15日）では、御代田で2年前に結婚式をしたデイビッド・ウォレン、ケイコ夫妻がまだイエス様を知らない教え子の米国人夫妻を連れて、福元謙六郎さん宅の集いに来られました。バンクーバー（16～18日）では館芳博さん宅で土曜日に家庭集会、日曜日には世界各地を電話回線で結んだ礼拝・福音集会が行われました。現地の方々は、「ゆったりした深い交わりができて、うれしかった」「福音と交わりを通して温かいものを感じた。また参加したい」などと喜びを語っていました。

これに先立ち、和田夫妻は6月末にイタリヤ・トリノ市の集会に集い、川口博子さんご一家や現地の日本人と交わり、続いてハワイ・ホノルルでドン・ギュン・キムさん、光藤いのりさんの結婚式（7月8日）に光藤夫妻と出席、芳明さんは不在の宣教師に代わって聖書のメッセージを語りました。トリノの博子さんからは「この触れ合いがこれからも続くことを願っています」のメールが届いています。和田さんは、ドイツよろこびの集い以来、イタリヤ、アメリカを巡回して、45日ぶりの帰宅となりました。



バンクーバー



シアトル



デンバー



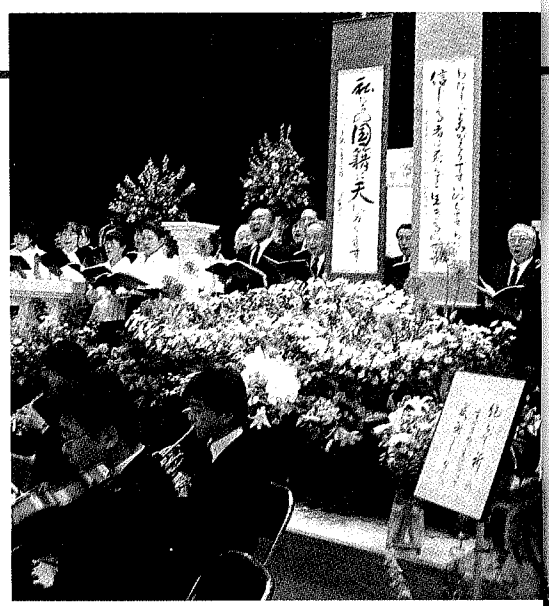
オクラホマ

Information Box
[インフォメーション・ボックス]

斎場に響くハレルヤ・コーラス

主を賛美した新井稔さんの葬儀

すい臓がんのため2006年5月18日に召天された新井稔さん（名古屋キリスト集会）の前夜式と葬儀が21日と22日に行われ、合わせて700人の方々がお出でくださいました。その際、稔さんの「信仰の証し」を収録したCD付き小冊子「天国で会いましょう」が渡され、葬儀では、全国からかけつけた集会の方々がハレルヤ・コーラスを合唱してイエス様をほめたたえました。またゴットホルト・ベック宣教師が「死は終わりではない」と聖書のメッセージを語り、長女の千穂さんは「父は天国で、先に召された母や弟の裕一と共に、私たちを見守ってくれていると思います。とてもさびしいですが、皆さまも悲しまないでください」とあいさつしました。一同、神の恵みに心満たされ、主を賛美した葬儀でした。　（名古屋集会・那須　信）





偶像との決別

2006年夏の5回目の御代田よろこびの集いが散会した8月20日午後、国際福音センター近くの空き地で、二つの仏壇が燃やされました。人間が造った仏壇は、神であるはずがなく、そのような偶像を拝んではならない、と聖書は戒めています。

唯一の神以外には神は存在しない…（1コリント 8・4）
偶像礼拝を避けなさい。（1コリント 10・14）



これらのみことばに従い、本多作次さん（京都）と本田元子さん（新潟）がそれぞれ、家にあった仏壇（偶像）を破棄することを決意したのです。お二人の信仰の証しです。

この日、仏壇を燃やす空き地には、ベック夫妻ら約60人のキリスト集会の方々が集まり、祈りと賛美の歌、聖書のメッセージの後、火がともされました。仏壇は勢いよく火炎を上げて30分ほどで灰に。本多さんと本田さんは、すっきりした面持ちで見守っていました。

感謝にあふれた子どもたちの賛美

2006年5月の「御代田　よろこびへのコンサート」で、子どもたちによるイエス様への賛美が、2曲演奏されました。全国各地の集会から、子どもたちが自由に参加しての賛美です。指揮や一部楽器などを担ってくれた高校生のお兄さん、お姉さんたちに支えられて、小・中学生や、小さな幼児たちまでもが、心ひとつにイエス様への賛美をおささげしている姿は、純粋で、聴いている大人たちも、ともに喜びに満たされました。賛美を通して初めて集会に導かれたお友だちや、お子さんの演奏を一目見ようと足を運んでくださったご家族の皆さんの上に、引き続きイエス様の恵みが豊かに注がれますように。心よりお祈りしましょう。



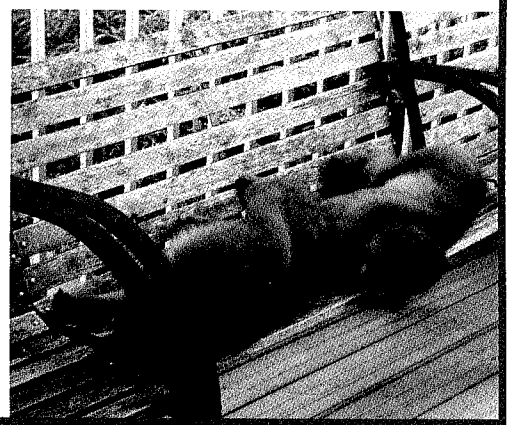




クマ、イノシシ、サル…に気をつけて

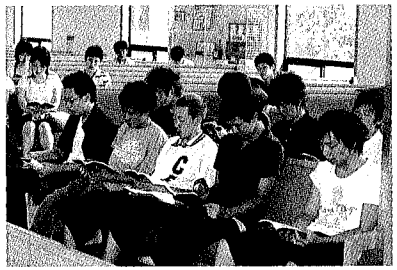
「この付近にもクマ、イノシシ、サル、カモシカなどの野生動物が出没するようになりました。夜、一人歩きするときは、鈴など音の出るものや光るものを持った方がいいと思います」――こんな注意が、2006年8月18日、御代田よろこびの集いで羽石真二さんから告げられました。

国際福音センター周辺では2，3年前から、イノシシなどによる農作物の被害が出ていますが、今年夏のよろこびの集いでは、参加した数人が、親子づれのイノシシなど野生哺乳動物と出会いました。そして、8月14日には福音センターにまでサルが侵入、台所のベンチで寝そべっている姿（写真）が見られました。

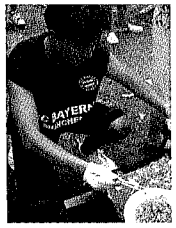


お疲れさま！ワークキャンプに42人が参加

2006年9月18日、西軽井沢国際福音センターで、清掃などの奉仕をするワークキャンプが行われました。9月15～17日の「よろこびの集い」の翌日が祝日であったため、帰宅を一日延ばした参加者もいて、いつもの倍近い42人の方々が汗を流してくださいました。










あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。（伝道者 12・1）

――キリスト集会で広がる若者たちの輪――

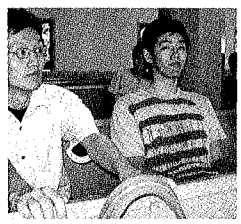


キリスト集会が東京・吉祥寺で発足して約40年、当初から集っている第一世代の方々が60代、70代と高齢化していく一方で、10代、20代、30代の第二世代、第三世代の若者たちの輪が広がって、集会全体に元気を与えています。

2006年8月18日～20日に国際福音センターで開かれた若者・中高生のバイブル・キャンプには、全国から169人（保護者28人を含む）が参加、聖書のメッセージを聞き、信仰の問題を語り合い、遠足を楽しむなど、寝食を共にしながら充実した3日間を過ごしました。このようなキャンプが開かれるのは年に一度ですが、イエス様を中心にした若者たちの集いは、各地で随時開かれています。東京では吉祥寺集会所に近い飯守恪太郎さん宅で中高生日曜クラス（若者の集い）、麻布の柿沼義一さん宅で水曜日午後7時から祈り会、他の家庭や集会所でも不定期に集いや祈り会が開かれています。麻布の祈り会には、10代後半から30代の年齢層10人ほどが集まり、賛美、聖書の輪読、祈り、食事の交わりなどをしていますが、「祈りの大切さを体験、互いの重荷を分かち合うなどの恵みをいただいています」（長岡慧さんの話）。小金井の岡本雅文さん宅で9月30日に開かれた集いには、中高生や20代の若者60数人が参加、全員が自己紹介をして、親密な交わりの時を過ごしました。

同様の集いは、埼玉県春日部市でも、竹沢規さん、吉田浩さん、藤井保夫さんらの家庭で不定期（祝日や土曜日が多い）に開かれています。参加者は中学生から30代後半までの年齢層で、ふだんは7、80人ですが、クリスマスのときには百人を数えます。地元の春日部をはじめ川越、東京、市川、横浜、ときには名古屋、仙台、福島などからの参加者もあります。集いでは聖書のメッセージと、若者の証しが語られます。「昨年2月から始まり、どんどん参加者がふえてきました。一時たるんだこともありましたが、真剣に祈った結果、建て直されて実のある交わりを持てるようになりました」と上田典広さん。春日部では若者の祈り会も木曜夜に持たれています。

（写真は春、夏、秋、冬の幾つかの「若者の集い」から）







こちら芦屋集会で～す from ASHIYA

見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。－神である主の御告げ。－わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。
（エゼキエル　34・11、15、16）

私たちの芦屋集会は、ちょうど20年前の1986年9月、神戸集会として礼拝をもったのが始まりでした。それまでは阪急電鉄岡本駅に近い小山さんのお宅で、ベックさんを迎えての家庭集会やミンヘンさんのケーキの会が開かれていましたが、一人ひとりは教会に通っていました。しかし、教会での信仰生活に行き詰まりを感じていた数人の信徒が、キリスト集会発行の「光よあれ」、「実を結ぶ命」などの書物を読み、また軽井沢や高知のバイブル・キャンプに参加して「ここ（キリスト集会）にこそ、生きて働く主イエス様がおられる」との確信を与えられ、神戸集会を建て上げて礼拝や聖餐にあずかるようになったのです。

まことに小さな集まりでしたが主イエス様だけに頼り、その憐れみに感謝と賛美を捧げる礼拝は喜びにあふれていました。礼拝の後は、ベック兄のお話をテープ録音で聴く福音集会、そしてスープとパンをいただきながらの交わり―と、霊的に満たされる時を過ごしました。

このように歩み始めた集会に、イエス様は次々に新しい魂を呼び寄せてくださいました。それぞれに悩みや苦しみを抱えた方々でした。やがて、集う人数は、小山さんのお宅に入りきれないほどになりました。それをご覧になったベックさんは「できるだけ大勢はいれる所が与えられるよう、祈りましょう」と言われ、皆で祈りました。その結果、87年3月、200人が集える田中公会堂を借りることができました。

その直後に、集会の友人である渡辺千里さんの葬儀が聖書に基づいて行われ、私たちは主が約束してくださっている「永遠の命」を確信することができ、「死は決して終わりではない」とみんなの思いが一つになりました。

また、聖書のメッセージを語ってくださる方が、毎週土曜・日曜と吉祥寺から来られるようになり、家庭集会、聖日礼拝、福音集会を通してみことばによる養いと主イエス様を中心とする交わりが豊かに与えられました。さらに猪名川や社などで開かれるキャンプを通しても、たくさんの恵みをいただきました。

神戸集会には兵庫・大阪・奈良・滋賀・京都・和歌山の6府県から集われるようになり、その後、祈りのうちに大阪集会が生まれました。

あのときは、その声が地を揺り動かしましたが、このたびは約束をもって、こう言われます。「わたしは、もう一度、地だけではなく、天も揺り動かす。」この「もう一度」ということばは、決して揺り動かされることのないものが残るために、すべての造られた、揺り動かされるものが取り除かれることを示しています。
（ヘブル　12・26、27）

95年1月17日に阪神淡路大震災が起こされました。これによって私たちは多くのことを学びました。一人ひとり、自分自身が全くちっぽけで役に立たない者であると思い知らされ、そのような者であることを主はご承知のうえで憐れんでくださっており、だからこそ大胆に祈ることができる、という恵みを困難の中で体験できました。また兄弟愛と、主にある一致、を知ることもできました。田中公会堂は全壊し使用不能となり、道路もズタズタになったなか、主は西神集会を起こされました。

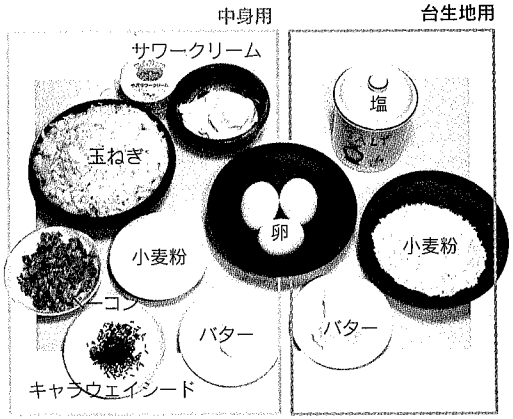
そして'98年12月、村田タヤ子さんの好意で芦屋市朝日ヶ丘町に真新しい集会所が与えられ、名称も神戸集会から今の芦屋集会に変わりました。ほぼ4年の言わば天幕生活の末の思わぬプレゼントでした。そこには一枚のステンドグラスが嵌められています。嵐の湖上で12弟子と共に舟に居て眠っておられるイエス様の場面です。

イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。…「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」
（ルカ　8・22、25）

今、芦屋集会は約100名の方が集っています、年配の兄弟姉妹もおられ、小さな子供たちもたくさんいます。ともに集会の宝です。主はほぼ毎回、新しい方を送り、群れに加えてくださり、主が生きて働いておられることを見せてくださっています。家庭集会が4箇所、祈り会、交わり会、子供集会が祈りと共に自発的にもたれ、一人ひとりが主と自分とで決められたように自由に担っています。

村田さんは今年1月29日、天に召されました。残された私たちもイエス様の命令に従って船に乗り込み、向こう岸へ渡ろうと思います。

芦屋集会がみこころにかなう歩みができますようにお祈りください。　（森島左武郎）



材料

《卵とバターは室温にもどしておく》

台生地
- 小麦粉　125g
- バター（有塩で良い）　65g
- 卵　1個
- 塩　小さじ1/2

中身
- 玉ねぎ　500g　（大3個程度）
- ベーコン　60g
- バター　30g　（炒めるのに使用）
- サワークリーム　125g
- 卵　2個
- 小麦粉　30g
- 塩　小さじ1/2
- キャラウェイシード　小さじ1/2（好みで）

○ サワークリームの分量が足りない場合は
足りない分をプレーンヨーグルトで代用しても良い

道具

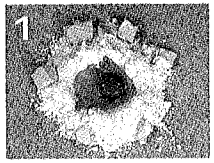
平らな台：
ここでは人工大理石の板を使用しているが
テーブル、ベニヤ板、クッキングマットなどでも良い
また、作り方**1.**～**3.**はボールの中でも作業できる

型：20×20の角形（ブラウニー型）
　　または21cmの丸型

その他：めん棒　フライパン　パイカッター

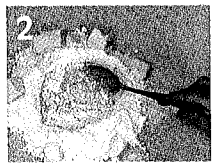
作り方

下準備 a. 粉はふるっておく



《台生地を作る》
こねパイ式

1. ふるった粉を 台の上に
こんもりと置き
中央をくぼませ
卵、砂糖、バターをのせる

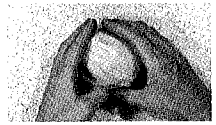


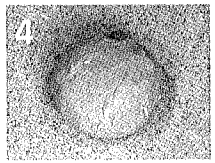
2. まず卵と粉をくずしながら
切りまぜ、次に全体を
まぜていく



3. バターが細かくなって
だいたい粉にまざったら
手早く一つにまとめる

ポイント
さっくりとおいしく
仕上げるには
均一にまぜるよりも
バターが溶ける前に
手早くまとめる





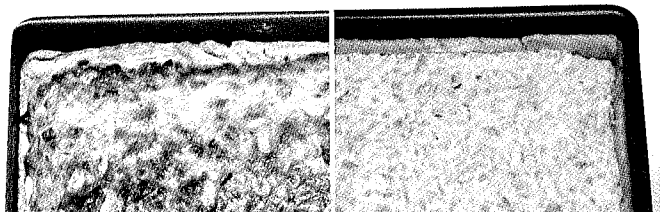
4. ラップをして冷蔵庫で
30分～1時間
休ませる

この状態で何日間か
冷蔵庫で保存しておく
ことができます

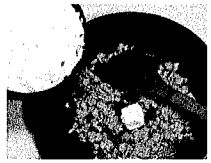
生地のまとめ方のコツ

生地が手についてまとまりにくい場合は、
粉を少し手にとり、こすりあわせるようにして
落とし、カードなどの道具を使って
生地全体をまとめていくと良いでしょう。

バターの温度もポイントです。バターは、硬いと
まざりにくいので室温にもどしておきますが、
室温が高く、柔らかくなりすぎて扱いにくい場合は
やや冷えた硬めの状態にして使うと、
まとまりやすくなります。



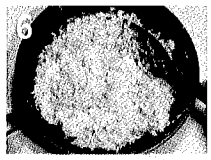
下準備 b. 玉ねぎ、ベーコンを粗いみじん切りにする



《中身の材料を炒める》

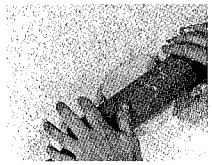
5. ベーコンを炒め
バターを落としてから
玉ねぎを入れてよく炒める

ポイント
玉ねぎを
焦がさないように
火加減に注意する



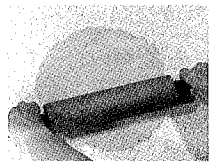
6. 玉ねぎが透き通ったら
火を止め冷ましておく

下準備 c. 型にバター等を塗っておく

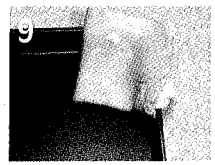


《型に生地を敷く》

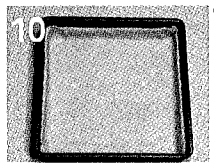
7. うすく打ち粉をした
台の上に生地をのせ
焼き型にあわせて
めん棒でのばす



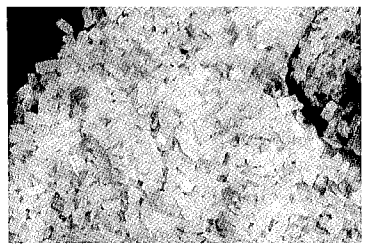
8. 焼き型より ひとまわり
大きくなったら
生地に粉をふり
4つ折りにたたむ



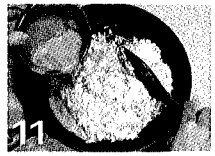
9. 生地を焼き型の上にのせ
広げて敷き詰める
側面は手で押さえながら
型にそわせる



10. 縁をパイカッターやナイフ等で
まっすぐ切りそろえ
切り落とした生地は底に敷く
フォーク等で生地に穴をあけ
ラップをして冷蔵庫に
入れておく

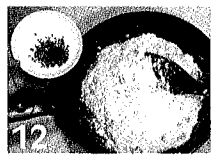


透き通った
玉ねぎ

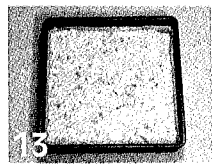


《中身の材料をまぜる》
オーブンを180℃にあたためる

11. 粗熱がとれた玉ねぎに
サワークリームを入れてまぜ
次に卵を入れてまぜる

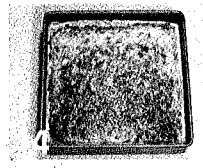


12. 粉、塩、キャラウェイシード
を入れてまぜる



《中身を型に入れて焼く》

13. 台生地の上に中身を入れ
180℃のオーブンで
45分くらい焼く



14. 焼き色がついてきたら
型をかたむけて
固まり具合を確認する
表面が変形しなければ
焼き上がり

すぐに型から出して
アツアツをどうぞ…
冷めても美味しいですよ



ツヴィーベルクーヘン

Zwiebelkuchen

玉ねぎケーキ